

自治のアトラクション¹⁾

——大島の自治は踊る芝居の大演幕——

阿 部 安 成

「大島ハ芝居ガマルデオ正月ダ……皆ンナハニコニコシテイル」²⁾

attraction001 癩そしてハンセン病をめぐる療養所において、芝居や歌舞伎の興行が、在園者によっておこなわれていたことは、療養所について少し調べたものには周知のところとあってよい。たとえば、国立療養所多磨全生園（以下療養所の名称は、多磨全生園、のとおり略記する）にある「全生園の隠れた史跡」案内板設置場所」を報せる案内板では、「3 全生劇場跡」が地図上にみせられ、その全生劇場跡にある案内板には、歌舞伎は、開所して三ヶ月もたたないうちに旧礼拝堂で上演された。一九一〇年に建てられた娯楽場（兼作業場）は全生座と名付けられ、春秋二回の公演によって歌舞伎は本格的になった。／一九二七年頃から、農産物品評会が近隣との融和も兼ねて開催され、出品者に全生座の招待券を渡したため、二日間の公演に院外の観衆が多いときは、三、〇〇〇人にも及んだ。／一九三七年に回り舞台の全生劇場が当処に竣工したが、七年後に失火によって焼失し歌舞伎も急速に衰退した。

との説明がみえた。またかつて同園内で運営されていたハンセン病図書館の壁面いっぱい貼ってあった手書きの年表には、1937年の項に「全生劇場竣工落成（三月二九日）／春季全生座歌舞伎に近隣町村から二日間で一八〇〇人余の来館があった（五月七、八日）」と、また1944年の項には「全生座歌舞伎を春に次いで外部に非公開で催す（一〇月六、七日）」

1) 本稿は2011年度滋賀大学研究推進プログラム「基盤研究」助成による研究課題「20世紀日本の病の重層（complications）と生命観の文化研究」と2012年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」の成果の1つである。

2) 中野秀憲「芝居」（『報知大島』第17号、1932年11月15日）。中野は「尋六」。

と鮮やかで太い黒色の筆跡で記されていた。

よく知られたことでありながら、療養所における芝居や歌舞伎など演劇の興行についての記録はほとんどないといってよいだろう。あるいは、そうした記録があるということが発信された例はないだろう。療養所内での芝居などの催しを伝える記録は、それぞれの療養所で発行された総合誌——たとえば、大島青松園であれば『藻汐草』や『青松』に掲載された記事で確かめられるくらいではないだろうか。こうした史料情況のなか、大島青松園であらためてみつかった『演芸団報』や『共楽団報』といった謄写版刷りの逐次刊行物は、きわめて稀有なテキストなのである。

本稿では、いま国立療養所大島青松園がある大島で過去に発行された、芝居興行にかんする逐次刊行物を紹介する。

attraction002 大島の療養所での芝居興行を報知したり記録したりする刷りものは、2009年にキリスト教霊交会教会堂図書室の書棚からでてきた³⁾。残ったテキストはごくわずかしかない。わたしが初めて大島に渡った2004年からずいぶんと年数を経たときであり、それまでもわたし以外に大島を訪うた研究者や新聞記者などもたくさんいたはずだ。だが、2009年までこれらのテキストを紹介したりその所在を発信したりしたものはひとりもいなかった。

大島での芝居興行を報せるテキストがみつかった現時において、ようやく、興行の濫觴や、興行元といってよい共楽団の創立年がわかり始めている（後述）。大島に残る演劇関係刊行物はすべて謄写版刷り（ガリ版刷り）で、どれも、大島での自治活動のメディアである『報知大島』の綴に綴じられていた。大島のキリスト教霊交会が所蔵するその『報知大島』綴の表紙には、「第一号=第廿四号／報知大島 附共楽団々報／編輯人 林健作」などと記され、そこに「共楽団々報」も付けられていることを表示していた。また4点の綴に綴

³⁾ このときのようすは、阿部安成「ゆくりなくも一国立療養所大島青松園キリスト教霊交会2009年4月・5月調査報告」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.113、2009年6月）を参照。そこに掲載した目録のうち演劇関係刊行物を抽出したリストを本稿（後掲）に載せた。その点数はわずかに15。この公開についてもいずれ方途を講じたい。

じられた『報知大島』の紙面第 1 面すべてに「石本」の印影の押印があり、演劇関係刊行物 15 点のすべてにもおなじ印影がみえる。のちにみるとおり、演劇関係刊行物に寄稿し、それだけでなくみずから編輯と発行の任にあたったこともある石本俊市の印であり、彼はまた、熱心なキリスト教信徒としてキリスト教霊交会の一員であり、かつ、大島自治活動の重鎮でもあった。自治会機関紙といってよい『報知大島』の綴に演劇関係刊行物も綴じられ、それがキリスト教霊交会教会堂図書室の書棚にしまわれていた——このようすは、大島での自治と芝居と信仰が結びつき、その要に石本がいたことをあらわしている。

石本を知るひとは、いまも大島にいる。だがそうしたひとたちの話をわたしが聞いたかぎりでは、石本の芝居好きが語られることはなかった。また、石本の歿後に編集された『青松』「故石本俊市兄追悼特集号」（通巻 356 号、1980 年 2 月）にも、芝居や演劇の二文字がまるで見えないのである。

本稿は、いまに残る 15 点の演劇関係刊行物と、『報知大島』掲載記事をとおして、大島での芝居興行のようすを紹介するとともに、療養者として生きた石本俊市を考えるための手立てを提示するものとなる。

attraction003 まずは、『報知大島』紙上で報じられた芝居興行のようすをみるとしよう。

第 12 号（1932 年 9 月 1 日）「雑報」欄での、第 4 回自治会及青年団役員改選結果の通知に、「娯楽」部長の職がみえる。

第 13 号（1932 年 9 月 15 日）冒頭記事「文化運動に点火せよ」の議論では、芝居は「文化運動」にはふくまれていないようだ。「雑報」欄に「共楽団総会」の見出しのもとでつぎのとおり、活動報告が掲載された。

九月四日午後四時三十分青年団クラブにて、前太夫元土屋氏の挨拶に初まり、藤田（兵）新太夫元の挨拶、娯楽部長、共楽団長兼任の提議あり、一同拍手をもつて賛成し、藤田（正）団長の挨拶、次い共楽団俳優幹事に橘高、小林、山脇及び団旗係に野崎各氏を互選にて推し、最後に藤田太夫元及朝倉座頭より科白の受渡しがあり、こゝに改革第一歩

をふみ出した共楽団の総会も盛会裏に閉会六時——

第15号(1932年10月15日)「雑報」欄に共楽団記事、

○秋季演芸を前にした共楽団俳優諸子は、九日午後六時半より青年団クラブにて座談会を開催、茶菓にうちとけつゝ各々劇に対して意見の交換あり、藤田太夫元からの一、二の協議事項あり、其の他種々相談し、九時散会／○尚、共楽団にては目下着々準備も運んで居り、役者も猛練習中であるから、多分開演は来月七・八日頃になるであらうと

第16号(1932年11月1日)「雑報」欄に共楽団懇談会記事、

廿三日青年団クラブにて、共楽団の懇談会が開かれました、藤田团长、前太夫元の清水氏、現太夫元藤田氏等の挨拶なり希望など述べられ、改革第一回秋期演芸開催について色々打ち合せがあり、後茶菓に寛ぎ散会

——太夫元とは興行主のことである。このかんの『報知大島』報道によって、芝居興行を



おこなう団体名が「共楽団」であること、その团长を自治会娯楽部長が兼任すること、1932年11月上旬に予定されている興行が、「改革第一回」となること、がわかる。

自治活動をおこなう組織がみずからのメディアをつくりだしたそのときはまた、演芸をめぐる「改革」のときでもあり、そのようすが自治メディアをとおして発信されたのだった⁴⁾。

attraction004 『報知大島』綴第1分冊では、『報知大島』第16号のつぎに、『演芸団報』第2号が綴じられている(左に題字写真。なお演劇関係逐次刊行物の号数表記はまちまちなので、本稿本文では「第*号」と統一した)。創刊号はない。9月23日と月日だけ記された第2号発行の年を1932年と推測した。発行兼編集者藤田兵吉はこのときの太夫元である。印刷所が報知大島

⁴⁾ 大島では『報知大島』発刊とほぼ同時期に療養所の総合誌というべき『藻汐草』も創刊された同誌上での演芸報道についてはべつの機会に論じることとする。

社であるため、『報知大島』と同じ判型、レイアウト（3段組み）、頁立て（横長の紙の両面に印刷して2つ折りで4頁立てとする）の紙面となっている。

この『演芸団報』は、芝居興行にさきがけて、口上、演目、梗概を広報することがそのおもな目的だとみえる。そうしたメディアの目的からすると、第2号は、それらがいくらか脇におかれてしまい、もっとも重要な発信内容は芝居興行をめぐる経歴とそれをふまえて「改革」をおこなう自分たちの態度表明にあったようだ。現時点で所在不明の創刊号の内容を十分に推し量ることができないが、もしかするとそれは創刊の挨拶でいどにすぎず、この第2号をもって実質の『演芸団報』刊行始動となったのではないだろうか。

ここには、共楽団長藤田正治「開演にあたりて」、太夫元藤田穂心「劇団の過去と将来」、「各方面よりの批評」として、三宅清泉「思ひのまゝ」と以志茂登「共楽団中興の秋」と健作生「役者諸君に言ふ」の3稿、「各主任の言」として、舞台仕近藤平市「舞台仕として」と衣裳仕松山政吉「劇団更生の秋」の2稿が載る。これらの稿で、紙面全4面の第1面から第4面の半分までを占めた。

団長の藤田は、芝居興行の「革進」を語る――

我が大島の誇りの一つとして、二十年来の歴史を有する共楽団は毎年一、二回の開演によつてその使命を果しつゝ今日に及びましたが、近時島の文化が著しく進化すると共に、娯楽機関も追々と新設され、或は改善を加へられつゝあるに、独り演芸方面のみは時代遅れの状態にありましたが、この秋に当り団員一同覚醒奮起され、愈々今秋上演と決するや一大革進を標榜して、特に今回は数名の新進俳優の出演と卓越せる技術を以て知られたるヒバリバンドの参加は劇団に新異彩を放つ事と存じます

ついで彼は、「多くの方々に演芸なるものを真に理解して頂く」ことをもとめる――

稍もすれば一口にお芝居か――と簡単に片附らるゝ事は誠に遺憾の次第であります、技術や設備に於ては到底専門家のそれと其の比ではありませんが、彼の真面目な青少年達を始め幾十名の人達が病む身を忘れて芸術に精進せんとする熱と意気と誠の現はれであり、且、劇中に含まれたる人情、風俗、道德等によりて観客に対し単なる娯楽に止らず、尚、何か貢献せんとする念願なる事を信じます

——大島への療養所設置から20数年を経たこのとき、共楽団の歴史が「二十年来」あるというのだから、その創立はほぼ開所と同時期になるのか（この点また後述）。その共楽団による芝居は娯楽の1つでありながら、しかし、「単なる娯楽」にとどまらなると示しながらも、そこにどういう意義があるのかはこのときはまだうまく説けないうでいた。

芝居を興行するには、俳優だけでなく、衣裳、小道具などを担当するものが必要で、彼らは諸役をそれぞれにうけもって、「かゝる犠牲を払ふのみにして各自に何の得る処もなきかと云へば決してそうでなく、各々自己の芸術的技倆を發揮して、例へば俳優諸君にしても昨日より今日明日と上達してゆくその喜びを味ひ、努力すればする程、より深い喜びに入り、かくして始めて真の芸術味なるものを味ひ得るものと信じます」と、芝居による効能の確信を述べた。藤田にとって、「自己を活かし他を益する芸術こそ真の芸術的存在価値を有するもの」なのである。集団における相互の自己実現の機会として芝居がとらえられたのだ。

このとき太夫元をつとめる藤田穂心は、題目のとおり「劇団の過去」をふりかえり、現状の課題を示した——「我が劇団旺盛時代は何と云つても大正の末年頃より昭和二、三年頃であつたと人は申します」と紹介しつつ、ただし、「その当時の劇は、近松物や黙阿弥物ばかりであつて、今日の我々にはその道の芸術味といふものが味ひ尽ざる感がありました」との感想も述べ、「偶々時代劇とか現代劇とかゞ脚色され演出されても、切々物の近松物や黙阿弥物に押されて、脚色者をして悲痛な思ひをさせたのであります」とも評する。こうした事態を改善するには、劇団の歴史をかえりみる必要があるという——

我が劇団創立期日は不明であります、大正四、五年頃に、役所から衣裳、鬘等を借り入れて頂いて演つてみた記録が残つて居ります、然し、六年頃より伝染病と云ふ言が社会人を刺戟して鬘衣裳の借り出しが止つて了つた、その為に劇団は一時頓座状態となつてをりましたが、大正九年に院内拡張を見、其折大会堂が新築され、その祝ひと云ふ格で頓座した劇団にお役所から新しい鬘五頭と中古衣裳五、六点を購入下されたそうであります、〔中略——引用者による。以下同〕其の頃（九年の秋）から舞台改善の聲が起り、全団員結束して開演毎に頂く私的同情金（即ち花）の中よりその費用の節約の限りをつ

くし、残った金で舞台用の床机を開演毎に二、三脚づゝ拵へていった、其後大正十二年の秋に至つて初めて、舞台の完全をみる事が出来たそうです、〔中略〕其の後昭和四年の御大典の折、御役所より公費で床机七脚と本鬘一頭を購入されたものであります、顧みるに公費支出の少けない島の劇団に、五間に三間——花道五間の床机舞台をもち、一個三円余りもいる大島製の鬘を二十有と、数十間の襖と百数十点の（包帯廃品）衣裳を蔵した我が劇団の今日あるは、全く大方の私的御同情と先輩諸氏の献身的労力の賜物の他ならぬと思ふのであります

と、劇団の過去がふりかえられた。ここでは、大正4、5年ころが劇団活動の始まりとたどられたようだ。

長々と記された劇団の歴史と現状の難点とはどのようにかかわるのか、べつにいうと、「では何故に我が劇団に時代物や現代物が演じにくいのか？」——「その最大の原因は衣裳にある」という。わずかな購入分と「包布、廃品、色染紙張」といった衣裳では、「現代物も時代物も出来ない」のだ。その衣裳が借りられたとしても、もう1つ、化粧のことがあり、「病者の顔に化粧致しますと、自然と厚くなります為に、他人の衣裳を借ると云ふことは気使ふ」との理由もあった。そうした煩わしさがあるため、これまでは「比較的無難の近松物」をかけてきたというのだった。劇団の「難局」は衣裳にあり、その「打開」には「寄贈」「大方の御理解」「当局者の御配慮」によらざるをえないとうったえたのだった。

ついで、三宅は（「思ひのまゝ」）、「此際、一般は是非新派をやつてほしいと希つてゐる様である」と要望を紹介した。また、「過去に於ける我が共楽団の全盛時代は、何と言ふても大正十二、三年頃より昭和二、三年頃迄の五、六年間」だったと回顧し、あわせてこれまで共楽団で尽力してきた人びとを想起しつつ、「今迄は尠くも俳優自身の娯楽として演ずる傾向が有つたが、将来は俳優自身も懸命なる努力をもつて真面目に練習して頂けば、従来稽古中によく起りし面白からぬ問題等は一層せらるゝであらうことを信ずる」との改善を要請する「以志茂登」とは、石本俊市の筆名とみてよい（「共楽団中興の秋」）。石本は、「今後の脚色には時代色を濃厚に織込み、人心に裨益あらしむべく努力せられること」も望んだ。

健作生（おそらく『報知大島』初代編輯者の林健作すなわち大野鶴一）は、「真面目に、熱心に」と、ここにとりあげた言葉は穏やかだが、本論の展開は容赦なく役者諸君にいつそうの精進を迫った。

舞台仕の近藤も、「明るい島建設建設と叫びつゝ、すべてに一步一步進みつゝある我が大島に唯一つ進まざるは何か、それは言ふ迄もなく共楽団では無からうか、〔中略〕近頃、娯楽方面に非常に進んで来たにもかゝらず、唯共楽団のみ眠つてゐると云ふことは誠に遺憾であると思つてゐる」と厳しい自覚をみせ、「改革」実現の具体策として「電気」「背景」「道具立て」から「舞台」を一新すると掲げた。

衣裳仕の松山は、「我が島にも自治制が施かれてより諸制度が改善せら、明るい島建設へ進みつゝある事は同慶の至りであります、此時に当り我が共楽団のみ益々衰へ、現在では殆ど行詰りの状態であります」と、切迫した現状認識を自治制展開とかかわらせてまず示した。「現今では諸般に互り娯楽機関も設けられて居りますけれども、我が共楽団は普通娯楽機関と異り、上演します劇そのものによつて他に比すべからざる大きな力と使命のあることを深く思はさゝれるものであります」と、娯楽といつてもその実施の仕方がほかと異なるのだと、衣裳道具の不備を改善するという難題をあげた。

さて、このときの芝居である。その告知については、第4面半分の紙面しかあたえられていない。「愈々今秋の芸題は決る！」と示された演目はずぎのとおり（ただしここでは興行月日は記されていない）。どちらにも「前委員会検閲済」とある。

現代劇「女は弱し母故に」全6幕11場、脚色者藤田穂心、書記者苗村正栄、主題歌林健作、作曲者岡本喜一。

時代劇「大岡政談／木鼠の久蔵」全7幕10場、振師朝倉要三郎、立師橘高勘二郎、太夫小野栄助、狂言藤田、朝倉、橘高。

ここにはまた、「共楽団役員一覧表」もある。娯楽部長兼演芸団長藤田正治、太夫元藤田兵吉、座頭朝倉要三郎、舞台主任近藤平市、衣裳兼鬘主任松山政吉、小道具主任白鳥政太郎、団相談役土屋万次郎、俳優幹事橘高勘二郎、山脇千代蔵、小林又市、団旗手野崎富助の布陣である。「俳優一覧」は「番付」でもあり、それは「昨秋の演劇に識者の公平なる評」

によって定めたという。

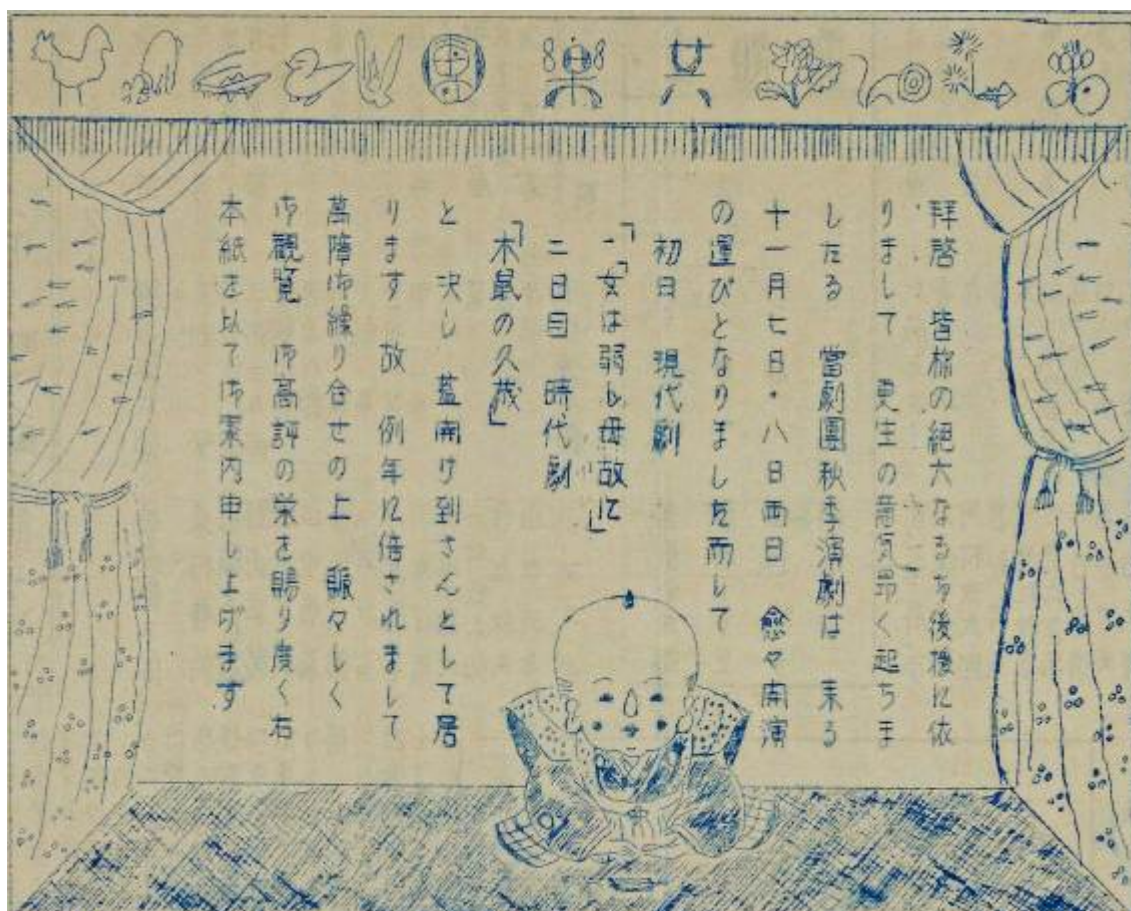
「舌代」には、「幕間の三分間を省いてアナウンサー式の説明者（舞台、背景其他登場人物や筋書の説明）を起たしめ、目の不自由な兄姉方に一人でも多く来て頂く様」にこの配慮も示された。また、「今迄になかった音楽団を我が劇に加へました関係上、今迄より観覧席が狭くなる」ともいう。その音楽団は5名で構成され、そのうちのひとり今井比沙志は、『報知大島』紙上でもよくみた名である。この号に寄稿した林健作は舞台「背景面」の担当者でもあった。

この『演芸団報』最終頁に、「共楽団々員各部署」担当者の一覧表がある。さきとうっかり「彼ら」とわたしは記したが、「古田ミネ子」「中村カズ江」「石川トキ子」が「衣裳及鬘仕」として、「方京マツノ」「山口竹子」が「はやし方」として共楽団に所属し、「俳優一覧」にその名がみえる「桑村春美」「三木幸美」「久保すえの」「高国玉枝」も女性のものであり、このように共楽団は男だけの組ではなかったのだ。

「伝染病」の療養者であるがために衣裳の借用がむつかしかったり、化粧をするには厚塗りにせざるをえなかったりと、病者特有の難点にいくつもの困難がくわわるなかで興行をつづけ、この「中興」のときには「革進」や「改革」といった語が用いられてこれからの共楽団の方向が模索されていた。娯楽一般とはちがうと構えてみても、このときはまだその固有性をはっきりとはだせないでいたのである。

attraction005 『演芸団報』第3号に載る演目はさきの第2号で示されたそれとおなじなので、この発行月日11月1日は1932年のこととなろう。発行者藤田兵吉、印刷所報知大島社。前号から1か月あまりのあいだをおいた発刊となった。開演は11月7日と8日の2日間である（右に題字写真）。





紙面構成は、第1面に「挨拶」（上に写真）、第2面に初日演目の「大キヤスト」「梗概」「舌代」など、第3面が2日目演目の「オール・キヤスト」「梗概」など、第4面が共楽団各部署の一覧表と「ざつぼう」欄に「後書」欄である。

紙面冒頭の「挨拶」では、「心ある島の人々の口から演劇改革の必要が叫ばれましてこの方、吾々劇団関係者は何故に改革が叫ばれるに至ったかと云ふ、そのよつてたつ根本原因をいろいろ考へた」という。それへの1つの応答が「演劇の意義」を説くところから始まる——それを「簡単に申しますなら、皆さんの無聊な精神生活をうるほし、些かでも生きることに対し暗示を与へんとするものであります、〔中略〕時代の進歩に従つて我々變つてゆく皆さんの精神生活にカテとしてあるべき筈の劇団が、返つてカテどころか皆さんからおきぼりをくつて一所で足ふみしてゐた」ところにその意義を実現できなかった要因があるととらえてみせた。こうした自省を経て、「改革の第一歩」が舞台にのぼるのだった。

初日の演目は「現代劇 女は弱し母故に」（次頁に写真）。これは「明治文壇の巨匠」（「舌

代) 江見水蔭原作だと記された。江見は硯友社同人だった。今公演の「新しい試み」である「音楽効果」として、主題歌の独唱を幕始(宮原安太郎)、五幕(鉄林ナヲエ)、六幕(山口竹子)に披露し、伴奏を岡本喜一が担当する。「キャスト外」の見出しのもとに記された上演の工夫は、「我が劇団将来の理想として、団員の総出演を望んで居ります、その最初の試みとして今回劇中に盆踊りを取り入れて、其の場で女子供の別なく踊に心得ある団員は、総出演を致す考へであります」という。団員総出演だけでなく、くわえて、「何方でも踊に心得のある方は、飛び入りを歓迎します」と観客をも会場へ、舞台へと誘っている。



「梗概」を載せよう——

父を欺して狂死せしめた三洲三五郎に復讐すべく考へた真珠子は、水泳中不良少年の為に沖に流されてゐる三洲家の令嬢香弥子を救つて、何故にか姿を消す／香弥子の弟繁は姉の恩人を探さんと八方手を尽す、だがやつと探ね得た恩人真珠子は繁の父である三洲家の当主三五郎のかつての妾であり、姉香弥子の許婚中谷との間に一子までもうけた中である——と云ふことをロケーションに小浜に出張した真珠子の属する映画会社の人々の口からきく、しかしこの時すでに繁は真珠子なしには頭底生きてゆくことの出来ない恋の虜となつてゐた／ロケーションを種に、三洲家の別荘を受けることが出来た真珠子は、中谷の目前にて復讐のトリックをやる、かくして数日——恋の真情を打ちあけた繁は、真珠子の言葉を誤解してか否か？終りに鉄道自殺をする、親の仇の對手の子に対して復讐することの出来た真珠子は、一子愛子が無頼漢の手によりとりもどしてくれた、筋骨たくましい純情、素朴の漁師錦太郎の大きな強い腕に抱かれて、ウンといつはりに満ち満ちた俗悪社会から退いて、のどかな一漁師の女房として余生を送つてゆくのである

という筋立てである。

さて、「舌代」である——

明治文壇の巨匠水陰の麗筆になるこの一編は、藤田氏の脚色に彩られ、そして主役運命の女真珠子に紛する朝倉君のコナシは、劇を織りゆく他の人々の心憎いまでの演出と相俟って、水陰の作は当劇団の手に依って初めて実を結びたるところにして、当劇団俳優連の技はこゝに初めて顕現し、両者渾一の神技は大島演劇界かつて見ざるのクライマックスに達するであらう——とは識者の疑はざるところ、新進俳優登龍門としての改革第一期の今回の企て、老巧練達の人々に対し果して試演俳優が如何程その真価を發揮するか——／連日に互る自称名優連の猛練習は、この劇見のがして演劇云々し能はざる大力演を見せるであらう／——待たれよ愈々開演の日を——

ここに告げられたとおり、「運命の母 浜島真珠子」の役は朝倉要三郎が演じる。朝倉はさきの『演芸団報』第2号掲載「番付」にはあがらず、「座頭」として役員一覧にその名がみえ、同紙本号でもやはり座頭となっていた。

2日めの「時代劇 大岡政談／木鼠の久蔵」は、脚色藤田兵吉、太夫小野栄助、総振朝倉涙笑、立師橘高薫、解説藤田穂心による。

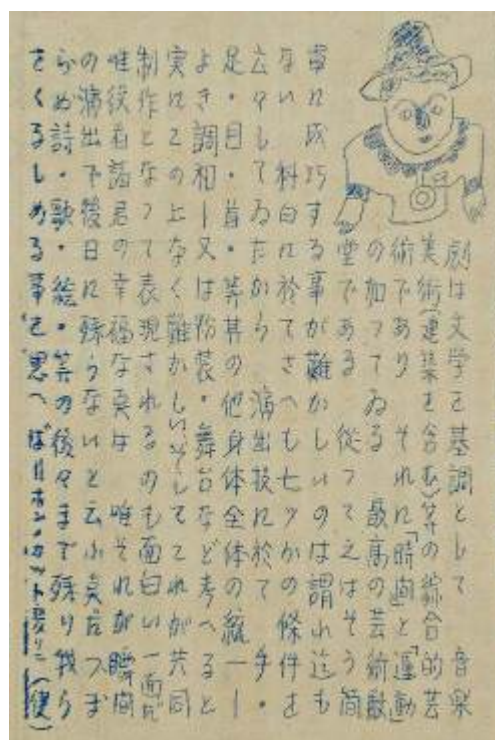
さて、「梗概」というと、よく知られた大岡越前守の裁きを結末とする、麻縄のごとく乱れ交わる人間関係が順をおって記され、その末尾には——

脚色者藤田氏の自慢のこの一編は、久蔵をはじめ全員の堂に入つたるその演出振りと音楽効果をねらう今度のこの力演は、場に溢るゝ観衆をしてうたゝ時のうつるのも腹のへるのも忘れさし、芸術の醇風にたゞし恍惚たらしむるものがあるだろう／とまれ時代物は当劇団の最も得意とすることは、既に定評の存する所、連日に互る名優連の猛練習は舞台方の努力と一偕になつてさぞや皆様の御期待にそむかざるの、一九三二年の掉尾を飾る大絵巻物が展開されることであらう

との宣伝となった。共楽団がもっとも得意とする「時代物」というが、前号で明かされたその苦心ゆえとのことなのだろうか。

つぎに、本号第2面で初日演目の「舌代」の位置にある文章をみよう——

劇は文学を基調として、音楽、美術（建築を含む）等の総合的芸術であり、それに「時間」と「運動」の加つてゐる最高の芸術殿堂である、従つて之はそう簡単に成巧する事が難しいのは謂ふ迄もない、科白に於てさへもセツかの条件を云々してゐたから、演出技に於て手・足・目・首・等其の他身体全体の統一——よき調和——又は粉装・舞台など考へると実にこの上なく難しい、そしてこれが共同制作となつて表現されるのも面白い一面だ、唯役者諸君の幸福な点は、唯それが瞬間の演出で後日に残らないと云ふ点だ、つまらぬ詩・歌・絵・等の後々まで残り、我らをくるしめる事を思へば＝ホンノカット変リニ（健）〔右上に写真〕



とは、最後のカナ書きをみれば、これは公演まえのちょっとした演劇論一般というところなのだろう。筆名の「健」とはおそらく林健作である。本号第4面の共楽団各部署一覧表では、前号のそれにはなかった「批評」という役がくわわり、そこに「現代劇 梅野義夫」「時代劇 石本俊市」「観客人気 上本隆重」「楽屋 藤田兵吉」とともに、「報知社 林健作」の名がみえる。大島報知社から派遣された批評者としての林の文章を、芝居の演目を事前に報せるメディアに載せたというところなのだろう。のちにみるとおり、林は『報知大島』第17号第2面に劇評を寄せることとなる。

本号第4面「ざつぼう」欄で、「●舞台背景幕修繕と新調背景幕縫ひの為、左の婦人方奉仕下さいました」とその奉仕者の名が列挙された。12日正午から午後4時までが14名、17日昼の0時半から午後5時までが11名の女性、1名の重複があるから総勢24名のお手伝いである。女性たちはこうした役割で芝居興行にくわわり、その役を担っていた。

attraction006 『演芸団報』第4号（発行年月日不詳、編輯兼発行人藤田兵吉、印刷

所報知大島社)は、その4面全面が劇評の構成となった。これは、さきの11月7日と8日の興行後に発行されたこととなる。

まず第1面冒頭の「挨拶」は――

改革の烽火をかゝげて蓋をあけて、併し其処には当然従来の過程から来る拙劣さを諸君の前に拵げたのみだつた、然り、我が劇団の低級さを示した、だが吾々はこの敗戦より来る可き春を目指して重土捲来飛躍せんとする意気・覚悟をもつ！！爰に公表する批評は、如何に島の有識者が我らを熱愛し鼓舞せんとしてゐるかを示すインテンシティーだ
／大方の御高覧を願ふ

と、「改革第一期」(同紙前号)との覚悟がみせられたにもかかわらず、どうも芳しくなかったようすの上演をつぎへと好転させるべく、同号がいわば反省号となったとみせている。

さきの興行の太夫元であり、芝居の脚本も書き、そして『演芸団報』の編輯兼発行人でもある藤田兵吉がまず、「開演の後を見て」と題した稿を寄せ、その冒頭を「失敗の多かつた今期の劇の後をふり復りて聊か愚感を陳べてみる」と書き出し、「あれ程迄に各部に渡つて専心の注意を払つて演つた劇が失敗した最大原因は脚色にあつた」とみずから省みた(なぜ脚色がまずかつたのかについての記述は言い訳と大島芝居の「因襲」=「歴史」の非難ばかりといってよく、ここではそれを省略する)。

ついで「批評」の紙面となり、さきの号で現代劇の批評担当と表示された梅野義夫の「女は弱し母故に」概評」。これはじつに、紙面ほぼ4段分(1面に3段)を占めた長文となった――「僕は遺憾乍ら幻滅を感じた、実の所、僕は僕自身の頭の愚鈍さを思つたりした程であつた」と手厳しい。失敗作となった要因は、「要約すればこの戯曲は創作方法に於いて、弁証法的に進めなかつたことが失敗である」というが、かんたんにいえば、筋の展開と主題とが結びついていなかった、となる。役者のいくにんかにも、「旧劇の長年の訓練」が現代劇にそぐわなかつたと評した。「要するに、演出技術の問題は現代劇にとつて、特に明日にかゝつてゐる」ということだ。

つぎにこれもまた前号での告知のとおり、石本俊市が「時代劇々評」を寄せた。この稿もほぼ紙面3段分の長文である。初日の現代劇と2日めの時代劇とをくらべれば、「時代劇

の方が余程成功してゐる」とひとまずは誉めたが、しかし、「従来の因襲からして只単にチヤンチヤンバラバラと活劇の場面さえ多く、亦、其立廻りを華々しくやりさへすれば夫れで効果百パーセントの様に俳優自身も亦観衆も考へ勝であることは、大いなる誤謬である」と難点を指摘する。この時代劇は、「脚色上大いなる欠陥があつた」し、この劇で挿入された「解説」をめぐつても、それを「入れなければ其劇の筋道が観衆に解らぬ様では、劇としての真価を疑はれる、是は小説の領分にして既に劇としての領域ではない」と芝居の構成にも注文が付き、役者の配役や演技の適不適も評しつつ、「総じて言へば、俳優が平常世間百般の事に不注意であるため、舞台に出ても不自然な処があり、滑稽な処があり、所謂^{にと}事^{さら}更に芝居じみた点が沢山に有る、故に芝居でもやらうと思ふ者は常に凡ての事物を凝視し些事に意を注ぐ要がある」と役者たろうとするものの平生の姿勢にも批評がおよび、かつ、「全体に台詞の声小さく、亦、数名舞台に現れて居り乍ら、自己の受持の科白及身振り等が済めば相手役が泣いて居やうが笑ふて居やうがお構ひなく、思入れは表情もせず、自らには何の関りもなげに恬然としてゐるために、其舞台はシラケて仕舞ふ事が多い」と、役者の資質や、舞台の演技指導や監督や演出の任にあたるものの能力まで問うた。

石本の評はさらに、「稽古中」のようすをもとりあげる——「幹部連、所謂先頭に立つて世話をする方々は何かに付いて真剣に考慮し熱心にやつてゐるが、其他の者は「俺はハシタ役だからどうでもいゝ」と言ふ様な事を耳にし、又、そうした態度を間々見受る、夫れが実演に臨んで不首尾に終る源因となる」とくれば、石本自身が「酷評に終つた感がある」と記すほどに厳しさのどあいも最高潮となるといえる一方で、石本はそれほどに芝居興行を注視していたことにもなる。

こうした容赦のない批評はまた、「兎に角今秋は改革々々と言ふ掛声に吾々も大いに期待」したゆえだとも石本は添えた。とはいへやはり、「既に改革第一歩に於て失敗せし事は遺憾至極」でもあり、「今回其失敗の第一源因は何と言つても脚色そのものにあ」つたので、それをふまえて、「新しい芸術形式」の登場を望んで稿を閉じた。

つぎに、事前に予告のなかつた筆名「島生」による「新派劇／旧派劇／漫評」が紙面 2 段半を使った。「俺は芸術（演芸）に付いては何等本格的な素養を持つてゐない」と書き出

した島生の評は、「一に脚本！、二に役者！、三に舞台と身拵え！」と突いた。たとえば、役者については——「科白が蓄音器式に流れ易く、動作が機械人形化したり、自分が科白を言ふ時にのみ緊張して、相手の科白になつた場合ポカーンとして居たり、稽古不足と言ふのか努力が足りないと言ふのか、其夜のなつて如何に力んでも駄目だ、稽古中から真面目と研究心を以て終始した者は際立て目についた」とは、なかなかの観察眼でもある。

島生はまた、「面白さ」の観点から現代劇を評する——

真珠子に其の復讐をピストルや刃によらさずして極めて合法的な現代的な手段を選ばしたところは、従来の劇から一步踏出してゐた、総ての事件には発生と発展と結末がある、今回の作は発生的事实を発展途上に於て科白を以て看客に知らしめんとした、其処に失敗がありはしなかつたか？あの長い対話が観客にアクビを誘つた、あれだけの復讐をせねばならなかつたその事実を観客の耳でなく目に訴えて欲しかつた

とは、科白と演技、言葉と身振りをめぐる重要な劇評の、あるいは演出や脚本の論点となろう。

島生は芝居好きなのだろう、共楽団は「現代劇に劣つてゐて〔中略〕旧劇に^{〔得手〕}えてゐる」との観点から、「兎も角、大島での旧派は何時の度も人気をよんでゐる、今回の劇は伝統的な型を破つてゐて、劇作価値等についても俳優の技の点についても、多少の批難はあるが、褒めてよいと思ふ」と讚えた。だが、筋の展開に難点をみつけるとともに、「も一つは、久蔵が妻子を路傍に残して引かれてゆく場に解説が飛び出した、哀調の追分と音楽を以てしたなれば、観客の感情をひきつかんで涙線に迄迫つたであらうものを！こゝは確に失敗した」と弾じた。演出の売りものが裏目にでたわけだ。

最後に彼は、興行や上演の全体に目配りをした——

「芝居は無学の眼学問」等と言つたのは遠い昔のこと、時代は生きて流れる、其流れに竿さして劇の内容もむつかしくなつて、通り一片の甘い事では看客も承知しない——深いものを深いものと要求する時代だ——見せて呉れる側も見る側も——演芸を退窟しのぎ位に考へないで、見識と理解を深めて欲しいと思ふ、今回に限つた事でもないが、観客が息づまる様な場面に於ても、尚面白半分のヤジを飛ばして、其効果を害ねたり、

劇は最後の幕が結論を示す最も重大な興味のある幕なのだ、それを帰りの支度でがやがやと他の観客に迷惑をかけること等々、将来特に注意して欲しい——芝居はよい役者がいればよくできるわけでもなく、優れた脚本家や演出家のみによってよい舞台が完成するのでもなく、衣裳や小道具や音楽や、そしてまた観客によっても舞台空間全体が構成され、それら妙趣ある結合が芝居をつくるのだと説く批評といってよいだろう。それはなにより共楽団がこころがけた「革進」や「改革」の具体相でもあったのだ。

ここで『報知大島』に目を転じると、第17号（1932年11月15日）第2面に林健作による「秋芝居・大づか見」（第2面）、「雑報」欄、「塩風」欄に芝居の記事が載った。

林は、「日頃眠つてゐる島の空気が一遍に新鮮になる、この一事だけでも大に芝居が歓迎されていゝと思ふ」と誉め、芝居の効力を説きながらも、「但し、劇つてものは楽しませる事の上に真の使命があることを識る可きだが」との注文もつけた。彼の評価では、初日の現代劇は「失敗」で、2日めの「旧劇は皆の決心？が観客をピンと謹重せしめてみた」とその前日の芝居よりはいくらかよい評価をあたえた。彼は観客への注文もつけた——「もつと親切に見なければならぬ、息づまる様なシーンまで下劣極まる弥次を面白がつて飛してゐる、静に見入つてゐる他の人の迷惑も考へてほしい」。林の評は厳しいが、しかし、「舞台装置」や「音楽効果」にも言及して、「大づか見」といいながら芝居の全体をとらえ、それをよくしてゆこうとする好意が感じられる。

第4面の砂広義雄「感想 生活と芸術」は、「芸術——それは生活が生み出す結晶でなければならない、よりよい生活にのみ真の芸術がある——とは多くの名士の叫ぶ所だが、芝居もこの意味に於て芸術である以上、もつと実生活を凝視した真の芸術を養はなくてはならない、多くわれらは日常生活に於てあまりに不真面目であり、冷淡であり、真剣さが無い」と論じた。芝居—芸術—日常という連係をふまえた感想である。第16号から大野生による「通俗講義／芸術概論」の連載が始まっていた。

「雑報」欄は、

七日・八日両日に互り改革を叫んで重土捲来立つた島の名物共楽団の秋期開演がありま

した、流石に進歩著しいものがあり、特に二日目時代劇など近來にない上出来だと専らの評判です、二日目に長島愛生園からの祝電が参りまして、一同を大変喜ばして下れました／尚、七日より愛生園より職員二人、看護婦さん二人、又、草津へゆかれる東京全生病院の看護婦さん二人、それぞれ御来島あり、芝居を御覧なさいました

との好評と観覧を伝えた。

「塩風」欄は、

秋芝居●評判が良かつたり悪かつたり●だがあの中から何かをきつと悟り得た筈、次回に備ふ可きだ●お客さん達に二日目が見て頂けなかつたの遺憾千万●改革とは新しい着物を着ることならず、頭の発展ならずや

もういちど第4面をみると、「文叢」欄に掲載された3つの子どもの文章のうち2つが芝居をとりあげていた。清水巧と中野秀憲（どちらも「尋六」）はともに「芝居」の論題をつけた。

僕が毎夜けいこを見てみた旧げきの久蔵はしまいになつてしまふかと思ひだしますと早く久蔵の幕をやればよいがなあと思ふ、するとなほ力がはいつて手に汗をもつ様になつてさきざきのことを思ひ浄べながら早く早くとおもつてゐると、すつと幕があいたら頭の中の幕で目をあけたらまだ幕がしまつてゐて、あちらからもこちらからも早うあけよう——とどなつてゐた

と、清水少年は幕が開くまえの恍惚とした自分をあらわし、また、

来る十一月七日、八日は僕らの楽しんで待つていた芝居だつた、朝起ると会堂はかけつけた、役者は皆んなでぶたいを作つている、僕はあまりうれしいので飛び廻つていた、其内にごはんがきたので家へ帰つたら、どの家でも芝居だ芝居だと言つてゐる、大島は芝居がまるでお正月だ、ごはんを食べて学校に来てみると、皆んなはにこにこしている、学校がすむと又会堂へ行つてみると、はやぎぶとんをしいているので僕もきれいなぎぶとんをしいた、そうしている内に時間は過ぎて早四時、僕は急いで帰つて売店へべんとう買に行つた、べんとうもうんと買うてふろしきにつつま会堂へ行つた、どんどんどんとたいこの音を聞くと僕はじつとしておられん、あつちへ行きこつちへ行きして芝居の

はじまるのを待っている、やがてひょうし木の音がかちかちと鳴ると、僕は自分の席できちんと見てみると、みんながやかましくわいわいわい言ったので、僕はだまつておれと言つてやろうと思つたが、言つたらおこられると思つて言はなかつた、その中、僕は眠たくなつたので、横になつてわ起きていると、何時の間にか寝てしまった、六幕か五幕か見ずに寝てみた、七幕目は目をこすつてよく見てかへつた

と中野少年は、夕方の開演に朝から落ち着かないようす、どの家(室)もにぎわうようす、太鼓の音が逸るころをいっそうかりたて、ほかのひとたちのおしゃべりが気になり、芝居が始まると疲れて眠ってしまった子どもである自分のようすをうまくあらわした(原文は漢字カナ表記)。

芝居にむきあう子どもの楽しみ方は、理屈をこねる大人とはだいぶ違っている。

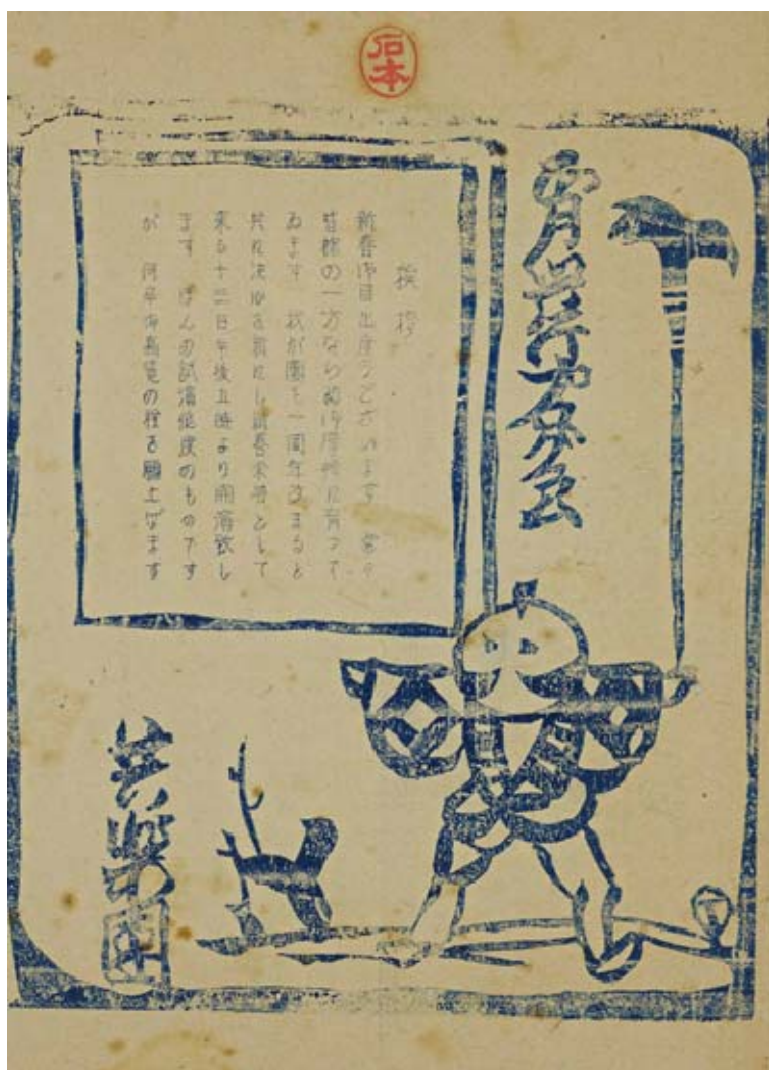
第 17 号(1932 年 12 月 1 日。原典に号数重複の誤記)の「塩風」欄に、「秋期演芸の批評も出揃つた、みんなシツカリしないと批評に劇の方が押し倒されるぞ」と、また、投稿欄「我らの声」には、岡目八目の名で「役者諸君よ」と題された稿が載り、役者へ激励が示された。

第 18 号(1932 年 12 月 15 日)の「SHIOKAZE」欄に、「一度失敗した演芸団が●フンゼン再起したことは●天晴れ天晴れ●我らのなす一つの事もよりよきを目ざしてなり」との文章がみえる。

attraction007 『正月興行プログラム』と題されたリーフレットは、おおよそ A5 判大の 1 枚の紙両面に謄写版刷りで文字を印刷して 2 つ折りにした 4 頁立てである(次頁に写真)。発行年月日は記されていない。『報知大島』綴での綴じられた場所からすれば、これは 1933 年正月興行の案内だろう。4 頁めとなる面に載った「共楽団一覧表 昭和八年一月」の表記をふまれば、この推測でよい。1932 年秋季につぐ 1933 年新春興行の案内だ。

まず「挨拶」がある――

新春御目出度うございます、常々皆様的一方ならぬ御厚情に育つてゐます、我が団も一同年改まると共に決心を新にし、新春余興として来る十三日午後五時より開演致します、



ほんの試演低度のものですが、何卒御高覧の程を願上げます

——これは酷評だった 1932 年 11 月興行につぐ芝居上演なのだろうが、「ほんの試演低度」との文言に、いまだ自信が漲ってはいないようすがうかがえてしまう。演目の 4 つを順にあげよう。

①「車夫の診療」(二場)。

配役が示されたが脚本や原作は不明。「あらすじ」は——

先生の替玉の車夫源公まんと伊勢屋のお嬢さんを

診察はしたが、結局手紙の文字でばれると云ふ…至極面白い喜劇です／坊ちゃん医師中井先生にラブをして一度でも診てもらいたいとて化病を使つた娘のお君、出かける途中で気が変り芸者をつれて遊山にゆく…先生…書生は困つた末、うすのろの源公を身替に使ひ、珍妙極まる車夫の診察…新人松本・小原の熱演喜劇——

②「父帰る」(一場)。これは菊池寛原作。配役には、朝倉要三郎が女形、ほかに山脇千代蔵、大野鶴一たちが登場。「あらすじ」は——

若気の至りから情婦を連れて出奔した父宗太郎、身を果かなんで投身自殺をはかつたが、不思議に助かつた母子四人——／星霜過ぎて二十年…或る晩秋の夕のこと——楽しい夕餉の話題にどうやらこの町へ父が帰つてゐるとの噂がのぼる、ぶきみな一家の沈黙がつづく……／突然、表の戸が開いて「ごめん」、父は前非を悔ひて帰つて来る、二十年の

^{〔不明〕} □ ん難も、父を見返へしたいばかりに生きて来た兄は、断じて父を容れない／父は再び悄然として闇に消えてゆく、母も妹も弟も、余りに厳めしい人生の前に突き伏す、純情な彼らの血の訴へに、一度ははりつめて心を鬼にして追ひ返へした賢一郎の心に、ほん然さめた肉親の情愛は、理性を越えて「新〔新二郎のことか〕…行つて父を連れてこい」と叫ばしめる、文豪菊地の世界的雄扁…老巧朝倉・山脇に新人大野を起用したる現代劇——

③「五郎劇／責任観念」（一場）。配役に山脇、梅野、朝倉の名が。「あらずじ」は——地位ある人がその地位を利用して責任を全うせず、反つてその日暮しの名もない者の方に強烈な責任観念があると云ふ、震災復興を扱った例の曾我廼屋五郎の社会劇——／同業者に打ち勝ちたいばかりの無理な入札から不正じみたと知りつゝも、五十匁の^{〔不明〕} □ 四十匁にせうとする桜屋の主人六部順三、それを又、都会の裏面だとして当然らく主張する腹黒き会計課長——よしや片田舎出の職人でも定吉は、一端請負たからにや…と極力反省さすけれども聞入れぬ／相愛の女お妙は、未来の夫の定さんと邪は邪にしても親身の兄二人の男を立てるため、流行る着物もよう買はず、貯めたお金を出す純情さ——終に郵便屋の行為に感じて良心の光りを仰ぐと云ふ…新春劈頭めでたい劇、朝倉の立役、之を助ける山脇、高国、若者連のにぎやかさも興ある劇

④「蝶千鳥曾我実録—中村の段」。配役に橘高、大野の名が。これについては——十八年の恨みと怨苦、明けて初春、裾にとけて美名を歌ふ、曾我物語りの中村の段、討ち入りに先達つて五郎の勘当ゆるすと云ふ、実に義理・恩愛の二筋道を咲かして通る母性の愛、薄幸な善信丸の最後の対面の美しき場、伝統を誇る島の段物、折紙付きの橘高・小林・野崎の熱演劇

4 頁の「共楽団一覧表 昭和八年一月」によると、顧問に奥秋広義、土屋万次郎、藤田兵吉、団長石本俊市、副団長北池為市、幹事に朝倉要次郎、松山政吉、近藤平一、山脇千代蔵、小林又市、大野鶴一、白鳥正明、秦伊三太、加藤貞一、渡辺直市。女性とおもわれる名が、俳優部部員に 5 名、衣裳部部員に 9 名（衣裳部全員）、嚙方に 1 名となった。

つぎのメディア『演芸団報』第 6 号には、「昭和七年拾二月八日」の年月日がみえる。編

輯と発行の担当者名はない。1面のみの紙面はすべて「共楽団員一覧表」となった。上記1933年1月付の一覧表とくらべると、幹事に渡辺直市の名がみえず、かわって今井比沙志がいる。女性名が俳優部部員に8名、嚙方に1名、衣裳部部員に9名。末尾に、「この外、入団せんとする者は団規約により団長にその旨申出で下さる様に、お願いいたします」とあるが、共楽団の規約はいまのところみつかっていない。

さきの正月興行のプログラムとこれでは、発行時期と綴じ位置がひっくりかえっている。

1932年12月発行のメディア『演芸団報』第6号紙上で広報されたとおり、共楽団団長が藤田から石本にかわり、石本団長の体制で1933年1月の興行がおこなわれた。さきの1932年秋季興行には酷評を寄せた石本が共楽団を指揮するようになったのである。「改革第一期」の失敗を経たその後の共楽団指揮を石本が担ったのである。

ここで『報知大島』をみよう。第20号（1933年1月17日）に塚本生による「新年演芸劇評／父帰る・責任観念」が載った——「今回の演芸は予想以上の大成功を修めて、一般観客の賞賛の的となつた事は事実である」との好評。同号「塩風」欄にもみえる芝居への短評は、

ほんの試演と銘打つた正月興行●うけがよいとて楽屋から天狗の子●あれ位の出来に調子をあげてはいけない●とて気をもむ幹部連●しくじればしくじるで●出来れば出来るで●ホンニ気のもめることぢややら●とも角今度こそ熱心のおかげやとは●ヤレホンニサ風だより●観客もよくなつたが●最後を待たずに立ち上るなぞ●もつと礼儀を心得てたも●これは何時の集会でも●冷汗ものだヨ

と最後は苦言でまとめられた。「情報」欄にも共楽団の記事、

●十三日——島の名物共楽団の新年演芸あり、共楽団ではほんの試演低度と銘を打つてみたが、相当な出来栄えであつた、当日の出し物は左の如し／「智・情・意・篇」／第一 喜劇車夫の診察／第二（智）父帰る／第三（意）責任観念／第四（情）曾我物語—中村の段

と、さきの興行プログラムにあった「ほんの試演」の語句はよほど興味をひいたのだろう、ここでもくりかえしその語句をとりあげながら、上演の評判は「試演」以上だったとよい。

同号にはまた、藤田正治「特別寄稿 新年演劇を見て」がある——「昨秋の失敗に奮起して陣容を立て直した故か、ハチ切れる様な意気があふれて、火の出る様な熱をみて、何を言ふよりもうれしさの極みだった」とは、やはりよい芝居だったようだ。

attraction008 『報知大島』第 30 号（1933 年 7 月 15 日）第 3 面「情報欄」に「共楽団情勢」の見出しで、「役員会 六月廿日、夏季演芸のことに付て色々協議、結局練習試演のつもりで左の芸題を各一幕づゝ、七月下旬に演ずることに決定した／現代劇 白痴殺し／喜劇 バケツの水／時代劇 時勢は移る」の記事。

第 30 号と第 31 号とのあいだに、つぎにみる 1933 年 7 月 25 日公演芝居のプログラムが綴じられていた「挨拶」とだけ冒頭に記された刷りものには、「来る二十五日午後七時半より会館前広場に於いて、左に掲げるプログラムに従ひ」としか日程は告知されていない。『報知大島』第 30 号、第 31 号の記事と、ここにいうプログラムを照らして上演の年月を推しはかった。

第 1 幕から第 3 幕までを順にみよう。まずは、「喜劇／バケツの水／曾我廼家五郎作」。
その「梗概」は、

ウソと誠をつきまぜてこさへた人の世のキビ団子／偽りの様でも怒れも出来ず、誠の様でも笑つて見られる／くすぐつたい人の世の裏表、惚れた女房に妬かれる事を快とする磯谷福三……愠気は女のたしなみと一ぺんもヤキモチを妬かない女房を持つた五兵衛の淋しい悲しみ……愠気は愛の反動だし／リンキしないは愛情のない証拠？思ひ余つた五兵衛がお楽（女房）のメートルを計ろうと云ふ、曾我廼家五郎の喜劇的一幕

——配役 15 名のうち 4 名が女性。

ついで、「社会劇／白痴殺し／津田和也作」の「梗概」、

虐げられつゝふみにじられつゝ生きるべく余儀なくされた無知の人々……／彼らがそこからノガれるべく選んだ道はいずれか？／神だろうか？／仏だろうか？／兄は米泥棒として獄につながれ、妹は白痴として隣人からもツマはじきされ杖とも柱とも頼る藤助には失恋の結果発狂され、盲目の親父藤兵衛の唯一つえらんだ道は白痴の我子を殺して返

すカマにで己が命を断つことだつた！……が果してこの悲惨な無慈悲の罪は誰が負ふべきだろうか？／涙なくして到底見られない社会悲劇的一幕

——配役は男8名、女1名。

最後が、「時代劇／時勢は移る／菊池寛作」の「梗概」、

誰がどんなことをして居ようと、黙々として巨人の足どりを運ぶ時勢の動き………そこには、たゞ来るものが来、去るものが去る、必然の法則のみが厳然と君臨する／そしてこの法則は、大きな社会の中にもはた又、一家族の中にも現れてその時、その処の人の心を掴み、悲哀と歓喜を呼び、善悪のカットウを展開す／某藩の軍奉行をつとめる佐幕論者を父に持つ源之丞／父の急を聞いて馳せつけた時は機すでにおそく、時勢のイタズラは許婚東伍の手を藉つて源エ門を倒してゐる／果して源之丞は如何になすだろうか！…仇を討つか……信念を守るか…強い生の足どりは、菊池寛氏の名筆によつてイカンなく發揮されて居るも、果して俳優達の演技が如何程迄に肉迫するか？

——配役は男6名、女1名。

その裏は、「共楽団員一覧表」。顧問奥秋広義と藤田兵吉、団長石本俊市、副団長北池為市、幹事朝倉要三郎、松山政吉、近藤平一、山脇千代蔵、小林又市、渡辺直一、白鳥政明、秦伊三太、加藤貞三、脚本部主任に渡辺、舞台部主任が近藤と加藤、小道具部主任に白鳥、俳優部主任が朝倉、山脇、小林、衣裳部主任が松山と秦。俳優部部員に女性9名、嚙方部に同1名、衣裳部部員9名全員が女性である。

第31号（1933年8月1日）第3面「情報欄」にも「共楽団情勢」の見出しで、「前号報知の通り共楽団では七月二十五日午後七時半よりにぎにぎしく開演、夏の夜の涼しい会館前広場に設けられた仮劇場は、早くからびつしりの盛況を極め、喜劇、社会劇、時代劇等総て近年にない上々の出来ばえだつたが、其中最も観衆の涙をそゝつたのは、津田和也氏作社会劇“白痴殺し”の藤助発狂と同時にその父藤兵衛が世のいたづらな運命を呪つて、白痴の娘殺しの一場面であり、拍手喝采大盛況裏に終了した」との記事。

ここで同号第4面「いろいろ」欄の1筆をみておこう。それは、「七月二十七日夜、当所の活動写真があつた、映画は癩予防協会作品、青春の頃、外、スキーの実写等面白く会堂

の夜は更かされた」とのこと。芝居と映画の対比ができる。

大島では、慰問の芝居も催される——「七月廿一日 高松温泉園芸部からの御慰問で徳島出口興行部中村歌雀氏一座の節劇“白浪五人男”が開演されました」と（「ニュース」欄、第32号、1933年8月20日）。

第33号（1933年9月1日）第3面「ニュース」欄に、「八月廿七日 共楽団員の総会開催」の記事。

第34号（1933年9月17日）第3面「情報」欄で、「九月二日 共楽団臨時委員協議会開催」と、「同日 近來揺籃のなかにあつた団員六十六名を持つ共楽団では、午後七時半総会を開催、先ず鉄林氏の開会の辞及団員点呼に続き、藤田氏の経過報告、梅野氏は臨時委員の立場としての感想をのべられ、次で上本氏及石本団長より挨拶ありて、団の発展を促す処あり、尚、団員一同秋の大芝居を目指して拍手喝采裏に勇み立つて閉会した、因みに今秋芸題は左の通りである。（委員会にて内容検閲中）／社会悲劇 線路工夫の死 一幕／新派悲劇（本訳物）マダム X 全三幕／時代劇 国定忠治 全四幕／歌舞伎劇 千代萩御殿の場 一幕」の記事。

第35号（1933年9月5日）第4面「零・・——」欄に、「△共楽団では今秋芸題を毎夜連続大車輪にケイコ中」との報道。

第36号（1933年10月20日）第3面「情報」欄に、「共楽団座談会／十月十一日の点灯合図に共楽団員は集合し、愛生園訪問者を中心に演芸方面の大座談会を開けり」の記事。

attraction009 このつぎに、『共楽団報』が綴じられている。以前の号と異なり縦長の紙面。号数の表示がなく、「編輯兼発行人 石本俊市」「発行所 共楽団」との記載、「十月廿八日」の月日表示。この紙面では、綴じられた位置や内容からして、1933年11月1日と2日の興行プログラムを教える。

冒頭の「挨拶」ではかつてと異なる演芸の「意義と使命」とが説かれる。

共楽団が趣味を有する人々によつて組織され、秋の演芸が単なる年中行事の一つとして催されて居た過去の時代と異り、演芸を通じて各療養所間の親善、社会人に対する癪者

生活の理解等々、非常に其の意義と使命の高揚された今日に於ては、尚更その感を深くするのであります、現在他所の療養所に於ける演劇が如何なる状態にあるか、如何なる役割を果しつつあるかに就いては、あちらから帰つた吾等の代表の口をかるまでもなく、そこでは所内大衆のかけがへのない慰安となつて居るばかりでなく、療養所方針の一端として、はたまた私達日頃の念願である癩根絶、並びに祖国浄化の大理想に達する一翼として大いなる役割を果して居るのであります、創立されて日の浅いあちらの演芸が斯くの如く発展して居るに比べ、永い歴史と尊い伝統を有する吾共楽団はいかようであろうか

と、過去を参照して、演芸の「役割」や、団の「永い歴史と尊い伝統」を確認して、「過去に於て共楽団はその内外にもつ錯綜した事情のため、皆様の御満足に値ひする立派な劇が上演出来ず」にいたが、(それが活動の停止なのか停滞なのかは不明ながらも)、「昨年の初秋の頃より識者に依つて演劇界刷新の口火が切られ、最近に到つては団の非常時が云々されて居ます」と、これまでも「中興」などと表現されたようすからまたそれが暗転するよ
うな事態への自覚をふまえ、「永遠の暗黒に^(きよくせき) 跼 躄 を余義なくされるのでないかと、一同危惧の念に包まれて居た」ところから「黎明の陽光は輝きそめた」との展望を見晴るかそうとする期待と意志が表明されたのである。跼躄とは世をはばかって暮らす意味をあらわす。この無署名の記事は、おそらく石本の執筆になるのだろう。

演目はまず、「時代劇 国定忠治／全四幕」、原作川村花菱、演出指揮山脇千代蔵、同助手渡辺直一、背景宮原安彦。「梗概」は、

正義が総てをすなほにするとしたら、義理と人情は一切をきれいにする、だがそれだけ義理と人情にしがまされると人はこの上なき苦しみの淵に投込まれる、苦しみの極、それはこの二枚の板にはさまれた時だ

——ここでは、幕ごとの概要も記されている(省略)。

つぎに「歌舞伎劇 先代萩 御殿之段」、演出指揮朝倉要三郎、同助手藤田兵吉、床小野栄助、背景近藤平一。梗概はなし。

第3の演目が「翻訳悲劇 マダム X／全三幕」、役者中木貞一、演出指揮藤田兵吉、同助

手朝倉要三郎、背景加藤貞三。その「梗概」は、

浮世の波のまにまに年くる事を余儀なくされたマダムでも、己が愛する者のためには凡てを投げうつていととはなかつた、悲しみと喜びを含む此世に生を享けながら、何と彼女の喜びの少なく悲しみの多きことよ、寄せては返し返しては寄す荒波の中に、己が心を全ふしようと企てたる時法の前には悪を形成する、けれど神聖な裁判官は其人と犯罪とを併せ考へて、これに対する正しき裁きをする

——それぞれの幕の概要もみよう。

第一幕 柏家旅館／蘭子は内縁の夫福田頼三が秘密探偵社長藤崎とたくらみ、己が最愛の子晋吉の許に金を強請に行こうとするので、遂にピストルで殺害する／第二幕 堀家の庭園／晋吉は弁護士として今日は其の初弁論の日である、そこに訪れる恵美子の心づくし、吾が愛するかつての妻の弁護と知るや知らずや、父親としての子へ愛情を注ぐ皮肉な運命に弄さるゝ堀輝夫の苦衷、その間における藤崎のゆすり／第三幕 法廷／なつかしき母の姿を目前に眺めつゝ、神ならぬ身の晋吉がそれを知る由もなく、果してどんな弁論の火蓋を切るだろうか？

最後が「歌舞伎劇 太閤記 十段目」、演出指揮朝倉要三郎、同助手橋高勘三郎、床小野栄助、背景加藤貞三。朝倉と橋高は配役にもついていた。

この興行時の団長は石本俊市、副団長近藤平市、書記に三木康平、日野新之助、鉄林清一郎、舞台部主任加藤貞三、宮原安彦、小道具部主任白鳥政明、衣裳部主任に松山政吉と秦伊三太。

この号の第4面4段すべての紙面を使って、藤田兵吉「開演前に」が載った。藤田はこのとき「先代萩」の演出指揮助手のみの担当だった。国立療養所長島愛生園の演劇をみた藤田は、それを「地方の名士方が多数観覧」していたことに注目して、「嬉しく感じた」と記した。これまで「病者の演劇は限られたる範囲内に演じられ、単なる病者の慰安に過ぎなかつた、又それでもよかつたのでありますし、病者もそれで満足に思ふて居た」のだが、いまや「癩問題が喧しくなり」、身内からこの病者をだしたことにより、家族たちが「常に冷たい視線と冷笑を向けられて居る」ので、そうした「家庭の者を救」うことに療養所外

からの演劇観覧がつながるのではないかと期待するのである——「私共の世界をより深く知って頂き、家族に対して御同情を少しでも得るならば、是に過ぎた喜びはないのであります、是がやがては社会に対しての私共の泪の叫びの援助ともなる所以であります」。

長島での上演観覧をとおして「我等劇に携る者にその使命なり働きなりを力強く教へられた」ので、「病者の慰安に過ぎなかつた」「単なる病者娯楽の他に何等の使命も働きも持つてゐませんでした」といわざるを得ないこれまでの芝居をつぎの段階へと発展させることが自分たちの課題だと定めていたところ、大島でも高松と庵治から官有船をだして名士に観劇してもらおうとの勧めが所長からあったという。さて、それはどうなったのか。この藤田の文章からはよくわからないのである。

つぎにあげる『報知大島』の記事によれば、この名士招待は実現したのであった。

attraction010 第37号（1933年11月9日）の第1面冒頭記事は、無署名の「演劇の使命」——

我らの演劇は、従来は内部の娯楽に過ぎず、俳優たる者も観衆も肉体の苦痛と精神のウツとを^{〔不明〕}□れて一夕を過ぎば、本来の目的は達せられたのであつた、然るに今回よりは広く外客を招待なし、「演劇の夕」を催し、以て療養所の実際に対して社会一般の理解を深めんと希ふに至つた、此処に於て我らの演劇は大なる使命つけられしものである。即ち癩根絶問題の役割を分担したのである。所長の御努力の前に益々謙遜に、且つ自覚を強くして斯の光榮の立場を全くされたきものである、百万の思想と論議に空しく過すよりも斯の一使命に活る事は、何程尊き生存価であり、得やうも計られない。／開幕の拍子木にみな緊張す

——長田穂波が編輯を担当したこの時期の『報知大島』紙上では、ときに「癩根絶」が論じられていた。療養所の外部にも公開するというこのときの芝居興行は、そのことによって、「癩根絶問題の役割を分担」するとの自覚が持たれたのだった。

この号の第3面「情報」欄には芝居の記事が多い——「十月十四日 共楽団では秋季演劇の日取決定に端を発し、種々演芸の準備方なり、来年度よりは楽屋の新設をなして大々

的に挙行する方針等の団総会を開けり」——この楽屋新設やこの興行からの「招待」について、10月19日開催の「予算編成協ギ会」で審議された。

さらに「情報」欄の記事を拾うと、「共楽団幹部会／十月二十日 秋季演芸演目「工夫の死」が種々の事情によつて上演都合上変更の件について合ギの上、太閤記に変更決定也り」、「共楽団座談会／十月二十八日 共楽団は秋季演出前に座談会を開き、試演方法等種々打合せ、座談会終了す」、10月31日開催の常務委員会で「孤立共楽団を団の請申通り自治会内の団となす件等を合議し」た（「予算案修正会兼協ギ会」）、「秋季演劇会／十一月一日、二日／両夜に互り兼てケイコ中なりし共楽団の演劇は花々しく出演された、本年は例年と趣きを異にし所よりは各方面の知名士を多数招待されて、芝居の夜の劇場は一寸の余地さへなき程満員の光景で、社会から取り離されていたかの如くなりし病者は、俄かに潤ひを見せて、早きは涙^{（マ）}まこぼちつ遠路の御足労を感歎し、例年の如くふる、つきものの雨に来島客方の道中難を厭ひつつ、海岸を離れる船をぼんやり見送り乍ら、更け夜の雨によるこびぬれる者幾人もあつた程な喜び、この上もなき演芸なりき」と。

同号「汐風」欄も、「◎所員席は遠来の観客で満員、そして上出来ぢやつたとて大評判◎これは芝居のことです」と伝えた。

第38号（1933年12月1日）第1面2つめの稿は、日野新之助による「黎明に処する覚悟」の題で芝居を論じた。

演劇の意義と使命／これは近時随所で耳にする言葉である／従来共に楽しむでその使命を全うしてゐた演劇が、向后単に共楽団のみの演劇でなく全患者の、否療養所の反映として重大なる意義と使命を醸しつゝあるは言を俟たない。この秋に当りて吾々はお互に演劇に関係あるなしに関はず、自己生活の反影として一度冷静に真摯な態度で、演劇の性質と存在に付いて考究する必要があると想ふ。／自己が如何に団外者とは云へ演劇の意義は深い、使命は大きい——と無責任に口で誇張し、この大きな重荷を共楽団にのみ担がせて自分は高見の見物とは余りに虫が好すぎはしないか？／演劇そのものも亦一新紀元を劃する秋であらうとは云ふ迄もない。と云つて必ずしも無暗に新しくなれ、旧殻を抜けて社会並な階級的な劇をやれと云ふのではない。歌舞伎が如何に旧時代の遺産

でも、歌ブ伎は歌舞伎で日本古典的芸術としての趣きと価値の悠久性を持つてゐる。／たゞ吾々の望むものは時代物についてゝあるが、矢鱈に階級意義を刺激し自覚を促すのを目的とした冷く固いものでなく、飽く迄対外的には合法的に豊かであり、対内的には趣向的であり快樂的であり、一面又啓発的であつて欲しいのである。／然し、此は無理な注文だ。事實は単なる理想に過ぎないであらう。だが理想である以上実現の可能性あるものでなければならぬ。要は当面者の努力如何に依つて理想に向ひ、漸次発展し接近して行くことが出来るのだ。／勿論それに付いては、内容を生かす形式、即ち準備が必要である、亦、企画的な効果を忘れてはならぬ。これには今後一層お役所の御理解と御援助を願はなければならない。／元来我が大島は誇りにもならないレベルの低い文化にシガミ付いて、足丈けバタバタしてゐる観があるが、他の療養所に退れなければならないと云ふ法則がない限り、他の模倣と遂隨に終る必要はない。一体、吾が大島が爾来フワツシヨ的精神——こゝで云ふフワツシヨとは独裁ではない、団結を云ふ意味だ——の希薄な為、あらゆる方面に文化の遅滞と阻止を強ひられてゐたことは甚だ遺憾である。／吾々は此の場合、大いに反省し旧来の弊風を捨て、こゝに云ふ一つの演劇から一丸の努力に吝ならざる様、その訓練と実行を具現したいものである。／尚今回、吾々の教育指導の為、武井先生御就任に当り、従来幼少遅々たる吾が教育問題解決に劃紀的曙光を見出した事は、誠に欣喜に堪えない。こゝに吾等は満腔の期待と喜びを持つて、先生の御健在を祈る次第である。以上

——第1面4段組みのうちのおよそ半分を占めた、『報知大島』の紙面の使い方としては大論稿となった記事をとおして、演劇を興行元の共楽団の専権領域とするのではなく、「全患者」の、療養所全体の事業とし、そして、たんなるひと寄せの出しものや余興や娯楽にとどめずに、「自己生活の反影」として対象化せよ、と呼びかけたのである。「元来我が大島は誇りにもならないレベルの低い文化にシガミ付いて」いたとの劣位にあるとの自覚から、演劇を文化に、また団結（ファッショ）へのきっかけにしようとの指示でもある。

この記事にいう演劇の意義と使命とは1つに、さきに第37号紙面においてみたとおり、癩根絶の課題遂行となる。かえりみれば、長田穂波が編輯を担当した本紙最初の号（第25

号、1933年5月1日)の穂波の署名記事「報知大島の使命」で彼は、療養者たちもみずから癩根絶を掲げ、その実現にむけた自分たちの実践として隔離の受容を身をもって示し、それをとおして自分たちの生存への理解を療養所外から得ようとしていた。よりいっそう外部への発信を働きかける芝居を軸に、療養者たちは、役柄を演じることで、舞台装置を拵えたりそれを操ったりすることで、また興行することで、外部の関心を引き寄せ、自分たちの生を保全させようとするものになってゆくのである。 男男 マスキュリニティ

同号第3面「情報」欄にも共楽団記事がみえる——「共楽団座談会／十一月六日、共楽団では秋季演劇打揚祝ひに馳走をし、夜に変わり、来る劇団の今後の大方針を色々交談し、意義深く進路のかためを約して座談会を閉ぢたり」、つづいて「共楽団役員改選／演劇の前途に大なる任務を有する共楽団役員選挙は、一般からもなりゆき状態に注目されてゐたが、共楽団の名により一層の力を見せて選挙当選の結果／团长 石本俊一／副团长 近藤平一／(幹事) 十名／朝倉要三郎 松山政吉／加藤貞三 今井比沙志／山脇千代蔵 小林又一／渡辺直一 梅野義夫／宮原安彦 野崎富助／以上団員総数六十六名に増員して、此処に共楽団員確定せり」——石本团长再選の報知である。

演劇の意義と使命の表明にかなりの気負いがうかがえた記事が載ったこの号以降、しばらく『報知大島』紙面から共楽団についての記事が消える。

attraction011 編輯兼発行人に石本俊市、発行所大島共楽団による『演芸団報』(号数表記なし)が1934年5月5日に発行された。縦長4面立て。第1面中央の「御案内」は、5月7日と8日に「春季演劇」を催すと報せ、冒頭記事「挨拶」は、「今回吾が共楽団に於きましては、皇太子殿下御降誕奉祝と当所創立第二十五週年祝賀とを兼ねて大演劇会を催すことになりました」と告げた。このときの皇太子は明仁でその誕生日は12月のこと。ずいぶんと遅い誕生祝いだが、それは「二月初めより三月末まで約二ヶ月間皇太子殿下御降誕記念果樹園の開墾」があったためだとの説明がある。くわえて、「他の催しと異り脚本選定に、台詞の書抜きに、そして練習に長い時日を要する」という演劇ならではの理由もあったため、ここまで延びてしまったとのこと。

春になったとはいえ、「私共病者は何の楽しみ、何の喜び、何の大望をか語り合ひませう？
／世の多くの人々は春花の観賞に、はたまた互ひに交す杯に浮かれ浮かれて居る中に、私共病者の世界は何とさびしい事とせう、社会の人は花に浮かれるに反して、私共は沈みがちにして、病気が動き易く、浮きたつものはネツコブと斑紋くらいの事」なのだ、沈鬱なようすをみせる。皇太子の誕生祝いの公演にはそぐわない挨拶にもみえるが、ともかくも、「この悩しい春の一夕、凡ての苦悩と病苦とを忘れお互ひに楽しく朗かに過して頂」こうと唱えれば、もはや上演の目的は自分たちの無聊となったと素直に率直に述べたようで、それはまたいまのわたしたちには心地よいともいえよう。

さて、この「奉祝」公演の出しものは豊富で、まず①「社会劇 嬰兒殺し 一幕」。原作は山本有三、演出指揮朝倉要三郎、背景近藤平一、「梗概」は、

なべての悲しみと苦しみは人の力でどうすることも出来ない、現世の固い約束であろうか？／妻と二人の子供に死なれて間もない巡査小山は、娘のつぎと侘しい生活を営んで居た、或る晩、彼は妻や子の事を忘れやうとして遺品の古着を売り払ってしまった、丁度その時、嬰兒の死体を発見したと言ふ村人の知らせに、現場に検視に行き、帰つて来た時、怪しい女が駐在所を訪れて来る、おづおづとして這入つて来たその女は、我と吾が子を殺した犯人であつた、よく事情を訊すと犯人は惨めな女土方でその日稼ぎの生活苦から殺した事を告白するので、小山は自分の境遇に思ひ較べて温い同情を寄せ諄々と訓戒する、犯人おあさは動かすべくもない法の力を悟り、進んで法規を甘受することになる。

②「現代劇 良心 一幕」の原作は曾我廼家五郎、演出指揮野崎富助、舞台装置加藤貞三、その「梗概」は、

銀行員渡辺の宅／お互ひの不心得と、亭主の浮気から病みついたヒステリーの妻艶子の宅に泥棒に這入つた元吉は、『私は死ぬのだから何もかも全部持つて帰つて下さい』と艶子に言はれて不気味になり、色々と事情を聞く、そして終に計略で亭主を遊び先から呼び返し、二人に懇々と説諭を加へ、目出度く仲円満に手打ちとなつたまではよかつたが？二人の話のつれづれにも、はたまた良心の呵責にも耐えかねた元吉が、とうとう改心す

るに到る、涙と笑ひのカクテル

③「現代劇 或日の三蔵 二幕」は、原作大倉桃郎、演出指揮渡辺直市、舞台装置宮原安彦、「梗概」は、

前科者を社会の人達は何故迫害するのだろうか——等しく同胞でありながら……まして其の人が正しかつた時、どんなに其の人の心は苦しいだろう、呪ひもしよう、時には反逆さへも企つるだろう、だが然し此処に其の人の全てを理解して慰めつゝ励ます人がたゞの一人でも居つたとしたら、果してその人はどんなにするだろう／第一幕 三蔵の家／第二幕社の前

④「歌舞伎劇 弁天娘女男の白浪 二幕」の原作脚本は黙阿弥翁、演出指揮に小林又市、舞台装置は加藤貞三、「梗概」は、

皆様おなじみの浜松家ゆすりの場より稲村ヶ崎の勢揃ひまで／曰、とはれて名乗るもおこがましいが〔後略〕

とくだんの科白がつづく。

⑤「時代劇 浦の苫屋 二場」の原作は菊池寛、演出指揮は山脇千代蔵、舞台装置に宮原安彦、「梗概」は、

南海道の一漁村、浜はいまし村人のざわめきに暮れはてし頃、一人の見慣れぬ旅人風の男が通りかゝつて来た、単調な村人が珍らしそうにして居る処へ近づいてなれなれしく声をかける、その男は実は三年前に難船して死んだと思つて居た久六であつた、なつかしい村人との挨拶もそこそこに久六は吾が家へと急ぐ／久六が憧れのわが家にたどりついた時、おまちはすでに人の妻となつて居た、久六は難船以来の本意ない不義理を事を分けて詫びたが、おまちは只さめざめと泣くのみであつた／その時浜から帰つて来た男は、皮肉にも若かりし頃おまちをめぐつての恋敵の壱兵衛であつた、久六は壱兵衛の蔑笑と侮蔑の前に今はどうすることもかなはず、自分の宿命とあきらめて家を出たが、佐吉に意久地なしだと言はれて再び引きかへし、おまちと壱兵衛を殺し、返す刃を己の胸に——そして奇しくも皮肉な愛欲の葛藤を解決する／以上

——社会劇、現代劇×2、歌舞伎劇、時代劇の構成で、ただし菊池寛の時代劇も現代につく

られた時代劇とみなせば、黙阿弥の芝居をのぞけば新派の出しものが多い。そうした演目の梗概にみえる文字は、「嬰兒の死体」「吾が子を殺した犯人」「浮気」「ヒステリー」「泥棒」「不気味」「前科者」「迫害」「反逆」「殺し」「愛欲」といったおどろおどろしく禍禍しい、また、ちょっぴり怖く遠ざけたい雰囲気醸しだしている。「涙と笑ひのカクテル」と形容される芝居であり、「葛藤を解決する」展開となるのではあるが、これらは奉祝にふさわしい演目だったのだろうか。自由におもしろく上演できてよかったというのであればなにもいうことはないし、奉祝にふさわしい演題でなければならないというつもりもないのだが。

最終第 4 面には、羽織や狂言集などの寄贈への「感謝欄」と「共楽団々員一覧表」。後者によると、団長石本俊市、副団長近藤平一、幹事に今井比沙志、梅野義夫、山脇千代蔵、渡辺直市、小林又市、朝倉要三郎、野崎富助、加藤貞三、宮原安彦、松山政吉、脚本部主任に今井と梅野、俳優部主任に朝倉、山脇、小林、渡辺、野崎、舞台部主任に加藤と宮原、衣裳部主任が松山。女性の団員は、俳優部に 9 名、衣裳部に 9 名、嚙方 1 名、楽屋 1 名（重複）。末尾に「現在団員は七十名です」と記された

さて、霊交会が所蔵する『報知大島』綴の第 3 分冊は、この共楽団発行のメディアに始まり、そのつぎに、『報知大島』第 46 号（1934 年 4 月 20 日）が綴じられている。『報知大島』はこの号から編輯（学芸部）と発行（常務委員会）の担当がかわり、紙面も横長 1 面のみとなる。その「予報」欄で、「○五月上旬 皇太子殿下御降誕奉祝並に当所創立二十五週年祝賀演劇会がある筈です」と報知していた。

attraction012 それからしばらく、『報知大島』紙面に芝居や共楽団の記事がみえないなか、編輯者石本俊市、発行所共楽団で『演芸』と名づけられた 1 面のみ刷りものが、1934 年 10 月 6 日付で発行され、それが『報知大島』綴に綴じられている。冒頭記事「挨拶」は、「友院外島の地を襲った未曾有の大風水禍も早や涙のうちに旬日を経過した、悼しき百幾十余の尊き犠牲者の慰霊祭も既に厳かに行せられた、吾等は今回の友院の惨害に対し、また広くは社会の風水禍に対し心から悼痛し、今秋の演劇開催に際しても是非の論を慎重に考慮の末、遂に開演にあたっては色々の御理解と御援助を吝まれない役所当局に対

し、其の伺ひをたてたのであります／処が役所当局におかせられても色々と考慮の結果、『誠に悲痛の極みであるが、然し吾等の演劇は単に娯楽のみに依つて行ふのではなく、又、今回は特に友院の方々も多数来島されて居られる秋だから、開演して観て頂く事もよいだろう』との通知に接し、我等団員一同、わだかまる懐疑の念を一掃し、こゝに男男しく奮然蹶起、吾が共楽団の父、故土屋万次郎氏追悼演劇を十月下旬、若しくは十一月上旬花々しく開演することになりました」と報せた。

ここに追悼の対象となった土屋とは、すでにみたとおり、『報知大島』第13号（1932年9月15日）「雑報」欄に「前太夫元土屋氏」と記され、『演芸団報』第2号（1932年9月23日）紙上で「団相談役」として共楽団団員一覧表にあげられ、また1933年『正月興行プログラム』では団の顧問と示された人物である。いまのところ彼の歿年はわからない。

あらたな演劇の意義と使命を宣言してからおよそ1年を経たところで、たんなる娯楽ではないとの役所（療養所当局）の言を容れて、追悼や慰霊の任に演劇をあてようとしたのである。このときの演目は、「現代劇 曾我廼家五郎作 十六形 三幕」「現代劇 菊地寛作／屋上の狂人 一幕」「時代劇 キング七月号掲載／山脇千代蔵脚色／やくざ順礼 三幕」「歌舞伎劇／絵本太閤記／本能寺之段」「歌舞伎劇／恋女房染分手綱／三吉愁歎の段」となる。

「感謝欄」では、「衣裳沢山」の寄贈をした修養団大島支部への謝意などをみせる。

『報知大島』第58号（1934年10月16日）「しほかぜ」欄の1筆が、「○演劇も当局の多大の援助に俳優一同大いに力を得、大道具、小道具共に秋の本舞台を目ざして一生懸命だ」と伝えた。同欄そのつぎの1筆も演劇に関連するのか——「○理解した者同志が御互ひに結び合ひスクラムを組んで前進する様は勇ましい」。

つづいてこんどは、表紙と表紙裏をふくめて12頁立てホチキス留めの小冊子が綴じられている（表紙には「九年秋季／演芸／共楽団」の表記。1934年10月29日発行。次頁に写真）。これがさきの1枚刷り『演芸』で知らされた「故土屋万次郎氏追悼演劇」のプログラムである。編輯兼発行人石本俊市、発行所大島共楽団。さきにあげられた5つの演目を、「屋上の狂人」と「十六形」以外は2回上演して、11月3日、4日、5日と3日間にわたる興行となった。



「御案内」ではあらためてこの上演が「先に逝かれた劇団の先輩故土屋万次郎氏の追悼演劇」だと陳べ、それぞれの「配役」や「梗概」を載せる。

このときの団員をみよう（「共楽団々員一覧表 昭和九年十月二十九日」）。团长石本俊市、副团长近藤平市、幹事に今井、梅野、朝倉、山脇、小林、渡辺、野崎、加藤、宮原、松山、脚本部主任が今井と梅野、俳優部主任に朝倉と山脇と小林と渡辺、舞台部主任に加藤、衣裳部主任が松山、女性は俳優部に8名、衣裳部に7名、嚟方に2名（1名重複）。

さて、11月3日「初日の芸題」は菊池寛原作の「屋上の狂人 一幕」、時は「明治二十年頃」、所は「讃岐瀬戸内海に面した一小島／勝島義助庭先」、演出指揮は野崎富助、「梗概」は、

勝島義助の長男義太郎は屋根へ上つて喜ぶ狂人だつた、両親は狐のセイと言ふ巫女 n お言葉を信じて青松葉でいぶす／義太郎の大変苦しんで居る所へ次男の末次郎が帰つて迷信の不合理を説いてさとす／兄弟の愛を表現した一幕

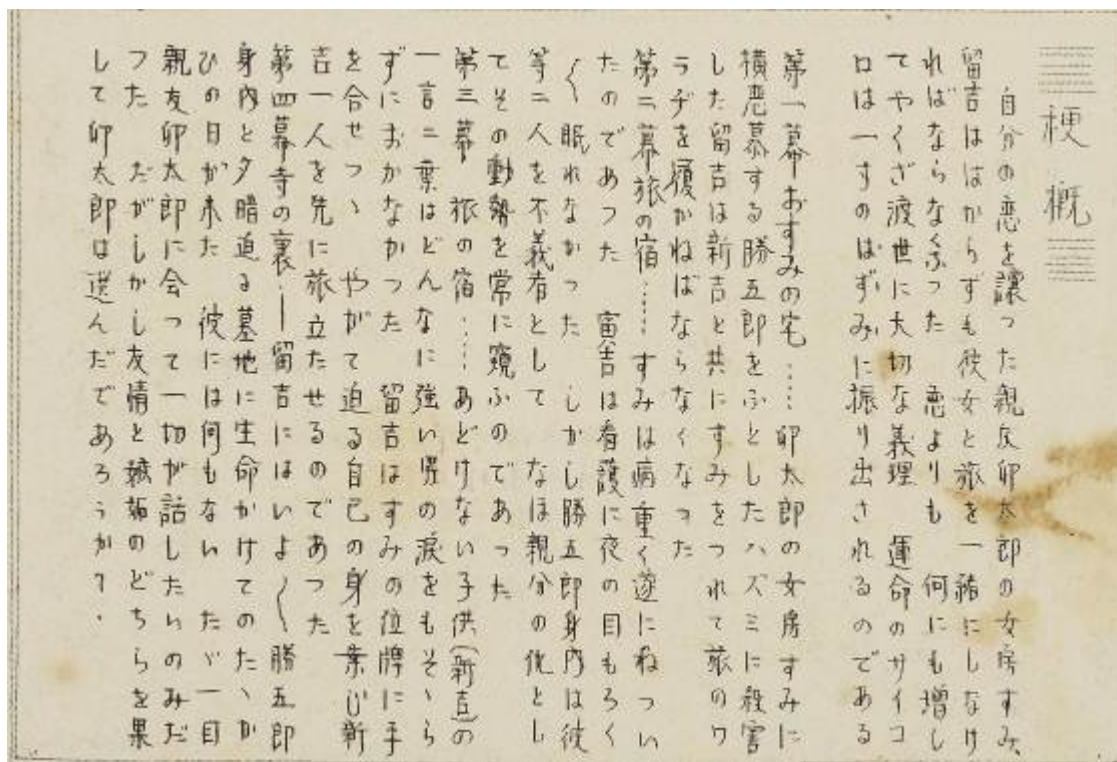
もう1つ、曾我廼家五郎作「現代喜劇 十六形 三幕」は、時は「冬の候」、所は「第一幕

木簡会社横手／第二幕 本田秀吉の宅／第三幕 木管会社事務所)、演出指揮渡辺迫市、「梗概」は、

第一幕—会社が賃銀を払ってくれないと言つて、いきり立つ職工達を職長のホンダが兎に角今夜の十時まで待つてくれとなだめる／第二幕……妹のおたかが十六形の時計を持つて夜をそく帰つて来たので、本田は不審に思ひ誰にもらつたかと責める、それは社長にもらつたのであつた／第三幕……本田は時計を持つて社長を訪ひ、いろいろ諷刺と皮肉で内省をうながした末、遂に社長に時計を買つてもらひ、其の金でいきり立つ職工達をなだめると言ふ劇

つぎが、「歌舞伎劇／恋女房染分手綱／三吉愁嘆之段」、演出指揮が小林一雄（これは「梗概」なし）。

11月4日「二日目の芸題」はまず、「時代劇 やくご順礼 四幕六場」、『キング』6月号掲載の原巖原作、山脇千代蔵脚色、時は「天保年間」、場所は「上州」、演出指揮は金川稔（「梗概」は下の写真参照）。



11月5日「三日目の芸題」は、「やくざ順礼」と「歌舞伎劇／絵本太閤記 本能寺之段」、演出指揮は小林又市。

「共楽団々員一覧表 昭和九年十月二十九日」が2頁にわたる。このとき、団長石本俊市、副団長近藤平市、幹事が今井比沙志、梅野義夫、朝倉要三郎、山脇千代蔵、小林又市、渡辺直市、野崎富助、加藤貞三、宮原安彦、松山政吉、脚本部主任が今井、俳優部主任が朝倉、山脇、小林、渡辺、野崎、舞台部主任が加藤と宮原、衣裳部主任が松山、あいかわらず衣裳部に女性が多いが、このときは部員9名中7名となった。

attraction013 『報知大島』第59号（1934年11月1日）「しほかぜ」欄は、かつての投書欄にみえた苦言や注意を内容とする記事となった——

芝居開演にあたって一般観覧者としての注意がこの前の室長会にあつた、特に今回は地方の諸名士も御来島される事だから、悪い感じの弥次やふるまひは是非ともつゝしまねばならぬ○人に対する善悪の感情なんか少しも考えずにふるまふことは、一つの自己陶醉と言へる○自己陶醉と言へば誰にも多少その心はあるのではあるが、時によると又、人によると、冷静に第三者が考へると馬鹿らしさを乗り越してアハレを催す折さへある、人によると又人の悪口をたゝいて得意がる人もあるが、これなんか一つの変態性と言へないこともない／人に与へる感情は物ごとの一寸のはずみで善悪にわかれるものだ、充分注意しなければならぬ

と、芝居での野次への注意からひとの感情論へと展開した。

詳細は不明ながら、第60号（1934年11月16日）の冒頭記事「慈善興業」は、「石井漢氏一行の手」による「私達の慈善興業」が「各地で催された」ことを、「私達島人のみで無く、広く日本の癩の歴史に特筆すべき劃期的問題である」と記した。これが芝居や演劇の催しなのかどうか。

第61号（1934年12月1日）「御知らせ」欄の1筆——「○共楽団では新年余興演劇会を開催せられるさうです」。

つぎに綴じられた『共楽団報』（号数表記なし）は、編輯石本俊市、発行共楽団で、1935

年1月7日発行（右に題字写真）。紙面は横長で1面のみ。共楽団
 団員一同による「舌代」は、「新年、御芽出度う／来る八日吾々一
 同会館に於て午後五時から思ひつきたまゝに芝居をして、御粗末な
 がら皆さんに観て戴いたらと思ひます、少女の踊りもあることなれ
 ば、何卒御来場、御観覧下されんことを」と。「思ひつきたまゝ」
 ということと、さきの意義や使命はどうかかわるのか。

演目は5題。

①「曾我廼家五郎作／喜劇 空けゆく空」の「梗概」は、

“愛は強い”／そのうちでも親子の愛、兄弟の愛、それは強い、
 然し乍らその強い愛は、それ故に往々家庭や社会に悲劇を生む、
 そしてこれが家の為とか、何の為とか、とコンガラガルと難しい
 ものが出来上る、それが此の世の中であつて、此の劇がそれだ、
 九年ぶりに出獄した兄を家の名誉のために弟が心をためした揚
 句、女房とも子供とも会つて芽出度く大団円と言ふ一幕

②「瀬戸英一作／現代劇 病葉」の「梗概」は、

その家庭はほんとうに不幸だつた、病人を片輪を抱えて、妹のおさよと留吉はイヤでも
 働かねば生きて行けなかつた、処が仕事はそんなに今の世の中にあるものでない、その
 為には色々の悲劇を生む、人は往々表面のみを眺めて毀誉褒貶を恣にするが、一掬の涙
 と迄は行かなくとも、その裏面にひそむ素因を理解するのを忘れてはならぬ

③「菊池寛作／時代劇 茅の屋根」の「梗概」は、

恋は人間にとって本能的に強い、時には何もかも抛つて終ふ程に——けれど、どんなに
 強い恋だつて、それだけでは人間生きて行けるものではない、この劇の香之進、一時は
 恋のトリコになつたが友人の戒めに悟り、そして彼は結局、恋に生きると共に吾身を生
 した、既に去年婦人会の手に依つてセリフ劇として上演されたものである

④「少女の踊り」。これは「新年」「月の砂漠」「所歌」にあわせて少女たちが踊るのだろ
 う。「出演者」は8名。



⑤「歌舞伎劇 恋飛脚大和往来 新口村の段」の「梗概」は記されていない。

attraction014 霊交会所蔵分『報知大島』綴の第4分冊になり、自治組織の体制もかわったところで、『報知大島』第74号（1935年4月10日）の「お知らせ」欄に1筆——「○芝居も近いうちにあると云ふ」とのみ記された。

時局柄、『報知大島』紙上でも、「節約」が掲げられることとなる（第76号、1935年4月24日。無署名冒頭記事論題）。他方で、第76号（号数表記誤記、1935年5月3日）の「潮風」欄で、「○舞台も立派なのが出来上つて誠にうれしい。これだつたら何でも上演来ると泌々思はされた」との報道もあった。このころ大島は、「○今療養所収容人員は超満員であります」と過密のようすだ（「お知らせ」欄、第78号、1935年5月10日）。

節約が指示され、在園者の人員が定員超過するなかでも、「運動会」や「セリフ劇」が「賑か」に実施されたり期待がもたれたりしている。後者は5月29日に予定されている「杖之友会創立三週年記念」のころに、「少年、少女数々の催し物と併せてある」企画で、「だし物は菊池寛氏の「袈裟」とそれから「三島の仇討」（「お知らせ」欄、第79号、1935年5月20日）。杖之友会とは大島の「盲人会」。これは共楽団ではなく杖之友会みずからが上演したようで、だから「セリフ劇」なのだった。「出来も良く面白かつた」との感想も掲示された（「潮風」欄、第80号、1935年6月1日）。

ひさしぶりに（おかしないい方かもしれないが）、『報知大島』綴に『共楽団報』が綴じられていた（第14号、1935年10月8日、1面のみ）。編集石本俊市、発行共楽団。記事は、「口上」「感謝欄」「開演に先立ちて」「お知らせ」「コピーニュース」。

「口上」は10月下旬ないし11月上旬に「秋季大演劇開催」の予定と告げた。稽古に努めるこのとき、いずれ「期日切迫致しては、改めて梗概を附しあるプログラムを御手許にお送り申す」というのだから、芝居開演までの段どりは、逐次刊行物（といっても発行間隔が一定していないようだが）『共楽団報』で事前に告知して、直前に配布されたプログラムを手にして当日会場へ、となるのだろう。演題は、歌舞伎で「傾城阿波鳴戸は順礼歌之段」「明烏六之曙吉原揚屋之段」、時代劇が「三日の娑婆」、現代劇として「愛は裁く」「大

尉の娘」「雪の夜の街」と予告された。「感謝欄」では、戯曲集などの寄贈に対して霊交会へ、脚本集など石本への謝意が示された。

「開演に先立ちて」を執筆したカズヲがだれなのかわからない。彼は、その「空には戦雲漲りて、人心恟々」としている「欧亜」と、「何の事柄もなく、聖代は平安に誠に幸いなる」「我皇国」とを対比し、この平安や幸福につつまれて「生きる屍にひとしい私達は如何に御礼を申してよいでせうか、かゝる御高恩に報ひ奉らんか」と自問し、「せめて我等の島を最も楽しいものに、されば先づ娯楽から」と応じた。このところ「発達著しい」野球とならべても「我演芸も亦可成り面白い事」だという。ここでは、「面白い」「娯楽」としての演芸なのである。ただし、「演芸は社会の表裏を明らかに表示したもの」であり、したがって、「其処には人の内幕も、且つ精神的に道徳的に、何か教へられるところ又多大」だと、なにかを学びとるべき機会や場としても演芸がとらえられているのである。もう1つ、「拙ない芝居でも幾分島の為になるならば」と、自分たちの生活圏としての「島」が強烈に意識されて、それもまた報恩の向かうところとなるのであった。

「コピーニュース」に記された内容は、編集後記としてもおかしくはない偶感といったところである。そこの1筆をとりあげると——「●演劇と云へば大昔からあつたものらしい。この島に於ても明治四十三年からある位だ」と。療養所開設の翌年にはすでに、大島で芝居上演があつたという。

第94号(1935年10月22日)冒頭記事「慈善劇」では、「今回は私達の為に慈善興業が催されることになつて、誠に有難い幸せである」との紹介と感謝が示された。この号の「潮風」欄には、「●芝居の稽古も毎夜されてゐるが、電灯がないのでほんとに不自由なことゝお察しする」と一言。これは共楽団のことだろう。

attraction015 第97号(1935年11月22日)の「潮風」欄は、ほんとうにひさしぶりに芝居の記事が多くなつた——「芝居も愈々来月六・七日の両日花々しく挙行すると云ふ。●差当り大方の皆様の御援助を乞ふ次第である。●そして何でも上手に演じて、上手に観て頂きたいものであるとつらつら考へてゐる。●「人生は一つの芝居なり」と云つた

人もある程で、その芝居を実地に舞台をはつてやるのだから面白いにきまつてゐる。〔中略〕

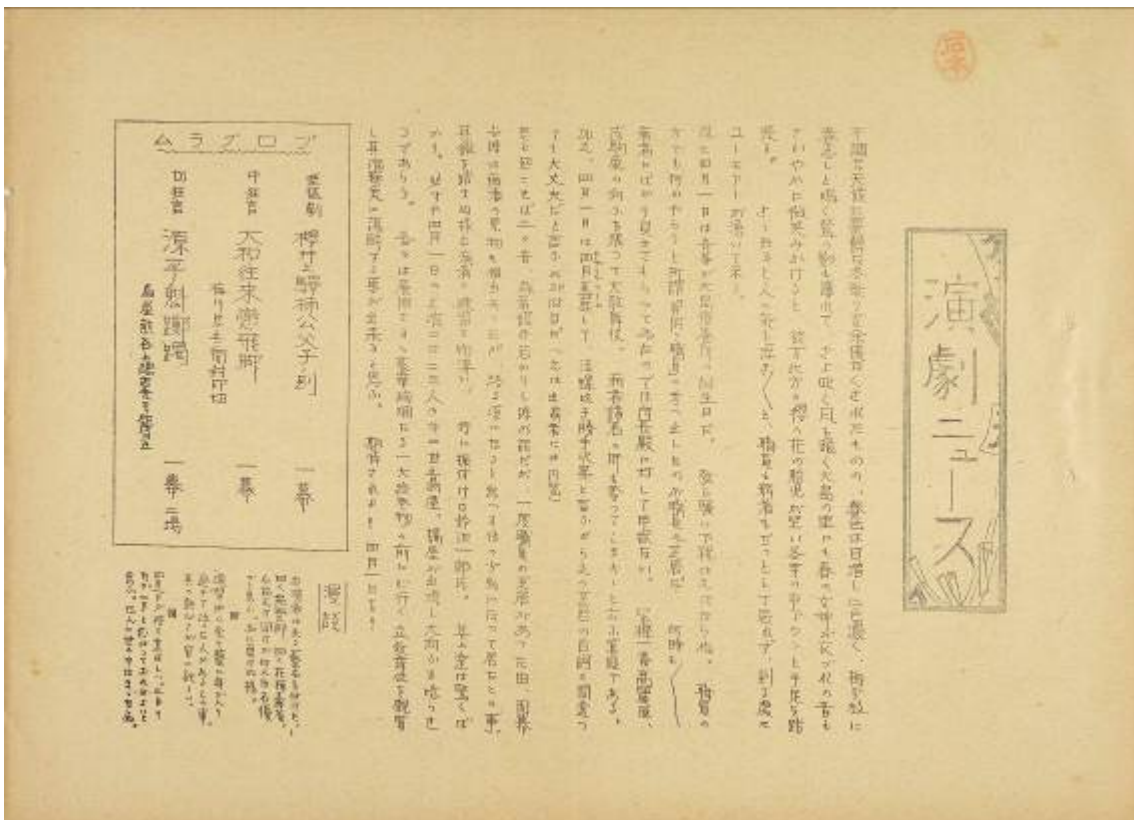
●シェークスピアはまた斯う云つてゐる。「世間はすべて芝居だ。男も女もみんなあそこで劇を演じてゐる役者に他ならず、それが舞台の面に現れたり引込んだりしてゐるのだ」と。

●こんどの芝居はその心情でみたら良い」云々と、記事は芝居の「仕草」の見方にまでおよぶ。

第98号(1935年12月15日)「しほかぜ」欄は、「●共楽団役員も改選になつたが、吾々としてはどうぞ今後ともに宜しく願ひ致したいものである」と示した。

第102号(1936年2月1日)「潮風」欄では、近日にせまった「自治会五週年記念日」をめぐる療養所内のようすを伝える——「それを祝賀すべく共楽団は芝居、XXXXXXXXXXを目論見居る。みんなは一体何を考へてゐるのだらうか」——の記事中8字分くらいが墨塗りとなっている。そこになにが記されていたのか、なにが人目にふれてはいけなかつたのか、紙面からはそれを読みとれなかつた。

これまで『報知大島』綴にはなかつたメディアである『演劇ニュース』(下に写真)が綴



じられていた。発行年月日、編集者、発行者は記されていない1枚刷りである。つぎに同紙第2号があるので、これは新創刊の逐次刊行物2号分か。末尾の「厠考」欄で、「■演劇ニュース第二報で役割を發表しましたが、之れは再發しませんから保存しておいて下さい／■第三号、第四号で本名や批評等を發表しますから御期待下さい」と記されたが、この『報知大島』綴に同紙の続号はなく、いずれもこの綴以外には大島でみつかっていない。

上演予定日は4月1日。このメディアが綴じられた位置からすると、これは1936年のことか。この日は「吾等が大島療養所の誕生日」だから4月1日を公演日にしたという。演題は、「琵琶劇 桜井之駅楠公父子ノ別 一幕」「中狂言 大和往来恋飛脚 一幕／梅川忠兵衛 封印切」「切狂言 源平魁躑躅 一幕二場／扇屋熊谷上総店先ヨリ加茂川迄」。

さてこれはだれによる興行なのだろうか——4月1日の大島療養所の誕生日に「歌ひ騒いで祝はえばならぬ。職員の方でも何かやろうと所謂「有閑の職員」の考へ出したのが職員の芝居だ、何時も何時も病者にばかり見せてもらつてみたのでは、所長殿に対して申訳ない。緊揮一番高麗屋、成駒屋の向ふを張つて大歌舞伎。病者諸君の肝を奪つてしまおゝと云ふ算段である」というのだから、これは療養所職員による芝居興行なのである。「思ひ起こせば二タ昔、森看護手若かりし時の話だが、一度職員の芝居があつた由」とあれば、このときがいわば職員芝居の始まりではないのだろう。つづく1文がおもしろい——「開幕当時は病者の見物も相当あつたが、終る頃になると数へる位の少数になつて居たとの事」だ。

号数表記のみついた第2号でははっきりと、「吾等待望の職員演劇もあと十日にせまつた」と記された。さきにみたとおりの「厠考」で「役割を發表します」と明示されたとおりの、この第2号紙面では演題のところに配役も記されている。さきの号紙面で「出演者は夫々芸名を付けた」とあるとおりの表記となっている。嵐正三郎、片岡小太夫、坂東清若といったたぐいである。

「有閑の職員」とのいくらかの自虐、「何時も病者にばかり見せてもらつてみたので」との対抗意識——こうした性根を曝しながら職員たちも演劇を催そうとしたところがおもしろい。さて、「病者」の入りはどのくらいだったろうか。

そして『共楽団報』第 16 号（1936 年 4 月 4 日、編輯石本俊市、発行共楽団）がつづき、4 月 6 日に「自治会創立五週年の記念日」を「祝賀」した「さゝやかな演劇を催」すと報じた（「御案内」）。ここで、「去る一日には職員の方々が非常に好評嘖々たる演劇がありました」とあり、1 枚刷りの『演劇ニュース』で案内された演劇は、4 月 1 日に予定された職員による上演だったと紹介されている。大島共楽団員一同は、職員演劇の披露につづけて、それから「日も経ぬ時にこれはまた貧弱極まる私達の演劇を皆様に提供致しますことは、聊か面映ゆい次第であります」とは嫌味とも自負ともうけとれるいい方をしたものの、またすぐに「今回は芸を見て頂くのが目的でなく、共に面白く可笑しく和やかな一夕を過ごし度いのであります」と、競いあいは端からしようとおもっていないとの態度を表明したのであった。

案内とプログラムが一体となったこの 1 枚刷りにあげられた演目は、「三番双万才」「曾我廼家五郎作／喜劇 手折れぬ花（一場）」「艷容女舞衣／酒屋之段」「菊池寛作／秀吉と清正（二幕）」。

演出指導渡辺直市による「手折れぬ花」の「梗概」は、

神商福原家は火事に遭ったが店員竹内のギセイ的活動で直ちに復興し、竹内は盲目となり福原夫妻の暖かい介抱を受ける身となつた。森田は竹内と花子との関係を絶たせる可く、竹内に追放を言ひ渡し、兇器をつきつけた。竹内の眼は開いた。竹内は花子の愛を求めて二ヶ月間偽盲目となつてみたことを告白し、儚い幸福に別れを告げて福原家を出る。

「酒屋之段」の演出指導は山脇で、「梗概」は記されていない。

「秀吉と清正」の演出指導は小林で、彼はみずから秀吉を演じてもいる（清正は山脇）。

「梗概」は、

主君秀吉のあらぬ勘気を蒙つた清正は桃山に引退り苦哀に耐へつゝ、尚ひたすらに七字の題目を念じ、主君秀吉の安泰と隆盛を祈つてみた。或る時大地震が起り、清正は主君の安否を思ふの余り死を覚悟して勘気の身を押して城にかけつた。至誠天に通じてか——秀吉の勘気は消え、彼をして“この大地震で君臣の心をへだつ垣が崩れたのだ”と快

笑せしめた。

1936 年春季興行を案内する『共楽団報』のつぎには、『報知大島』「自治会創立五週年記念号」（第 106 号、1936 年 4 月 8 日）が綴じられていた。

attraction016 『報知大島』第 121 号（1936 年 10 月 21 日）は、ひさしぶりの芝居記事紙面となった。冒頭 1 段の記事は「黎明前後」と題された。

わが大島に於ける演芸大会は、遠くその端を明治四十三年に発してゐる、当時の一座は今日見る如き確たる団体組織のものではなく、文字通り芝居好きの——アマチュアといふか、デイレツタントといふか、左様した人たちが集つてきて、一夜漬けのアマチュアリズムを発揮したといふ程度に過ぎなかつた、従つて「出しもの」も全く罪のない、その場限りの^{〔にわか〕}二輪加芝居であつた、それでもこのユーモアとウイットの不連続線上に爆発する哄笑の颯風^{〔にわか〕}に、秋の一夜を笑ひこけたといふ、ニツポンの歴史が「天の岩戸」の爆笑から生れた如く、何と！わがオホシマの劇団も明朗な笑劇から生れたのである／その後、大正三年に至り御大典記念として久しく生れるべくして生れなかつた演劇の組織化が提唱され、その結果、故川上武市氏を会長に、故加藤孫三郎氏を副会長に推して、茲に共楽団トループが結成されたのである。／以来、荏苒として茲に二十有余年、今日の盛大を見るに至つたのである、これは偏へに“われらが所長”の深き御理解と社会の御同情、全職員の御鞭撻、更に病友一同の支援に因るものである、しかし！また一面、そこに幾多の先輩諸子が人知れず流した汗と涙のあつたことを忘れては、誠に申訳なきことである、共楽団も初期に於ては芝居に要する衣裳道具の類は殆んど凡てが手製であつたといふ、かれらがこの手工時代に於て特に地味なこの方面の仕事に貢献して下さつた方に、今特定室に在られる O 氏があり、今は故人となられた林孫三郎氏がある、O 氏は道具係として、林氏は衣裳係として、灼きつくやうな土用の真最中、既に玉なす汗を拭ひも致さず、秋芝居の準備の為に、大童になつてをられたといふ。今筆者は、曾て一古老から聴いたことを想ひ起した、“小くとも O 氏の失明を早めたものは、あの芝居の準備であつた”といふことを！

——この記事は、大島での演芸大会の始まりが、療養所開設の翌年 1910 年であったこと、御大典記念として 1914 年に共楽団が結成されたことを伝えている。

まるで演劇特集号の観があるこの号にはもう 1 つ、「未完成ユーモレスク (一) / ——初代大島演劇団挿話——」と題された記事が載っている。

当時の人々には“靴”といふ言葉が恐つそろしく魅惑的だつた、まるで文学幼年が童話の中で“魔法のお靴”を見つけたやうなものだつた。——こんなことをいふと読者諸子はそれこそクツクツとお笑ひになるかもしれないが、当時患者内には何と！その靴なるものが、総計二足しきやなかつたといふ、結局、二足の靴では芝居が出来ぬといふのでクロタビを以てこれに代用した（俺に穿かさねえ靴なら、芝居なんか止してシベイ） / 当時療養所内には、種々「おかみ」の御手数を煩はし抜いた揚句入所した山野バツシヨウ組が多かつた。さ、芝居稽古だといふと、われもわれもと“警官”の役割を買つて出たといふ、それもその筈、当時の常識的解釈に従へば、「芝居とは必らず警官の出るものなり」といふことになつてゐたからだ。ま、こんな訳で結局光栄ある役割を獲得した彼氏に至つては「ズイキの涙を流しました」だなんてな半借音的な生温さでは済まされない。下稽古そつちのけで、断然！意気揚々として巡回に出かけたといふ。今なら儀礼的にでも、感想を叩いてあげるのだが…………… / この稿続く / ^{ビリーヴ・イット・オア・ナット} 事實は嘘よりも奇なり

[S・Y 生]

——署名の S・Y 生とは、おそらくこの時期の『報知大島』編輯担当者である。

attraction017 かなり間があいたうえて、『報知大島』第 149 号（1937 年 11 月 9 日）

「潮風」欄の 2 筆が、「○共楽団の新幹部がきまつた。宜敷くお願し○常であつたら秋期演芸が開催される頃である。今年はないから淋しい。が、吾々が遥かに祈る皇軍戦捷こそ、いみぢくも尊い赤誠なのである」と戦時下の演芸のようすを伝えた。さきにみた「この稿続く」と閉じられた稿「未完成ユーモレスク」もその続編がみえない。「春季運動会」は開けても（第 160 号、1938 年 4 月 23 日）、芝居は無理か。

前月には、「総動員の線に添つて、吾が大島にも病者精神総動員の気運が醸成され、去月

二十三日各種団体代表者が座談会の席上、これが発揚の申合せを決議されて良心に訴へる運動となつた」と報じられた（「各種団体申合せ」、第 161 号、1938 年 5 月 13 日）。これをうけておなじ号の「潮風」欄もそれを、「△島の総動員意識も愈々軌道に乗つた△挙島一致これからか実際運動にうつるべきだ」とうけとめた。

おそらく 1941 年に発行された『報知大島』第 183 号（8 月 2 日）の冒頭記事は、論題を「娯楽」とした。そこでは時局をふまえ、しかし「健全なる娯楽」の必要性を説いている。

現在残る『報知大島』は第 184 号（8 月 20 日）までとなる。

play

本稿では、大島で発行された芝居興行にかかわる印刷物のうち、いま残っている 15 点を概観し、できるだけその内容がわかるように多くの紙幅を用いてそれを引用し、その読み方をおおまかに提示してみた。ここにあげた芝居をめぐる刷りものを読んだうえで提起できる論点は 2 つある。1 つは本稿冒頭に記した論点、大島での自治と芝居と信仰との結びつきであり、もう 1 つはそれともかかわる芝居興行の意味である。

論点の第 1 では、石本俊市という療養者を介して大島での自治と芝居と信仰との連環を理解する見通しを立てた。「故石本俊市兄追悼特集号」を組んだ前掲『青松』収載の「協和会（自治会）役職就任経歴」によると、1932 年から 1936 年にかけて石本は、大島自治組織を指導する長としての常務委員長を 4 期にわたってつとめ、また評議員にも 1 期だけ選出されている。共楽団が「改革第一期」を掲げて再始動しながらその初発で躓いたそのあとを石本が団長として率い、その「中興」へと彼が牽引したとあってよい。この時期の大島キリスト教霊交会は、そのひととなりゆえに信徒を魅了し霊交会の支柱となったといえる三宅官之治と、文筆をとおした表現とさまざまなひとによるそれを束ねる編集と刻苦勉勵のすがたをみせる療養者としての長田穂波がいて、その二者のいわば少し後ろにいた躍動する青年が石本だった。このころ彼は、20 歳台の終わりから 30 歳台にはいったところだった。『報知大島』『共楽団報』『霊交』といった 3 つのメディアに、濃淡や多寡はあれ、石本はみずからの生を投影し刻印していたのだった。わたしはその書史のうへのつながりを

とらえて、大島での自治と芝居と信仰の連環とその要に石本がいたことを指摘した。

では、その連環の中身や仕組みはどうか——いまの時点でのおおまかな見通しを述べておくと、とりわけ1930年から1940年代にかけての療養所では、「報恩」しかも皇国へのそれへの契機として自治も信仰も芝居も再設定されることとなる。自らを治める身体の駆動としての大島の自治、外来の宗教を時局にみあう教えに整えようとする霊交会のキリスト教、そして、芝居をたんなる娯楽から脱却させその興行をとおしてかかわるものすべてをそれぞれに自己実現させる舞台として再編された共楽団の演劇——この連環のなかで、大島芝居の意味も問えるように、いまはおもう。自治に魅力をあたえ、自治を牽引する1つのきっかけとして大島での芝居があった。

481



2012年の夏は、ほとんど『報知大島』を読みつづけていた。今年もことのほか暑い夏だった。しかも節電の夏。こうしたときにサービスなのか、岡山から高松にむかう快速マリンライナーの車内は強速冷風による冷房ですさまじく寒かった。

車内が冷えすぎていると車掌にうったえると、あっためますか？だって。コンビニかって、すぐに返せなかったわたしは芸人になれない。

大島にはあいかわらず重機が入り、超大型クレーンやダンプカーをみても、それに慣れつつあった。島に大量のコンクリートが運び込まれ、他方で解体された古い寮の瓦礫は積まれたままになっていた。

大島青松園は、2012年7月1日の時点で、在園者数が90人、平均年齢が80.8歳となった（「大島青松園入所者数・年齢別数等概況」『青松』通巻第665号、2012年8月）。新しくできる寮への引っ越しをめぐる議論がつづいていると聞く。



使われることのないヘリポートに高速艇用の栈橋。その栈橋のあたりで、海ほたるを初めて見た。淡い灯が波間にゆれる。（上：2012年8月6日、右：同年8月7日）

国立療養所大島青松園キリスト教霊交会所蔵分『報知大島』綴合綴芝居関係刊行物

第一号=第廿四号/報知大島 附共楽団々報/編輯人 林健作『報知大島』綴第1分冊1932年~1933年]						
演芸団報 NO.2	9月23日	発行兼編輯者藤田兵吉	発行兼編輯者藤田兵吉	共楽団長藤田正治「開演にあたりて」/太夫元 藤田穂心「劇団の過去と将来」/「各方面よりの批評」/三宅清泉「思ひのまゝ」/以志茂登「共楽団中興の秋」/健作生「役者諸君に言ふ」/「各主任の言」/舞台仕 近藤平市「舞台仕として」/衣裳仕 松山政吉「劇団更生の秋」/「舌代」/「現代劇」/時代劇/共楽団役員一覧表/共楽団々員各部署	石本の認印	両面4頁1枚
演芸団報 NO.3	11月1日	*	発行者藤田兵吉	「挨拶」/「現代劇」/女は弱し/母故に/「時代劇」/木鼠の久蔵/「愈々部署確定す」/「ざつぼう」/「後書」	石本の認印	両面4頁1枚
演芸団報 NO.4	*	編輯兼発行人藤田兵吉	編輯兼発行人藤田兵吉	「挨拶」/藤田兵吉「開演の後を見て」/「批評」/梅野義夫「女は弱し母故に」概評/石本俊市「時代劇々評」/島生「新派劇旧派劇漫評」	石本の認印	両面4頁1枚
正月興行プログラム	*	*	[共楽団]	「挨拶」/「一番目 車夫の診察 二場」/「二番目 父帰る 一場」/「三番目 責任観念 一場」/「大切 蝶千鳥曾我実録」/「共楽団一覧表 昭和八年一月」	石本の認印	両面4頁1枚、A5判
演芸団報 第六号	*	*	*	「共楽団員一覧表」	石本の認印	1頁1枚
第二十五号=第四十五号/報知大島 附共楽団々報/編輯人 長田穂波『報知大島』綴第2分冊1933年~1934年]						
[プログラム]	*	*	大島共楽団	「挨拶」/「第一幕/喜劇バケツの水」/「第二幕/社会劇白痴殺し」/「第三幕/時代劇情勢は移る」/「共楽団員一覧表」	石本の認印	両面2頁1枚、第30号挟み込み
共楽団報	10月28日	編輯兼発行人石本俊市	発行所共楽団	共楽団員一同/「挨拶」/「御案内」/「時代劇 国定忠治」/「歌舞伎劇 先代萩」/「翻訳悲劇 マダムX」/「歌舞伎劇 太閤記」/[共楽団員一覧表]/藤田兵吉「開演前に」	石本の認印	両面4頁1枚
第四十六号=第七十二号/報知大島/附共楽団々報『報知大島』綴第3分冊1934年~1935年]						
演芸団報	昭和9年5月5日	編輯兼発行人石本俊市	発行所大島共楽団	共楽団員一同「挨拶」/「御案内」/「社会劇 嬰兒殺し 一幕」/「現代劇 良心 一幕」/「現代劇 或日の三蔵 二幕」/「歌舞伎劇 弁天娘女男の白浪 二幕」/「時代劇 浦の苫屋 二場」/「感謝欄」/「共楽団々員一覧表」	石本の認印	両面2頁2枚
演芸	昭和9年10月6日	編輯者石本俊市	発行所共楽団	共楽団々員一同「挨拶」/「感謝欄」/「故土屋万次郎氏追悼演劇芸題」/「入団者」	石本の認印	片面1頁1枚
九年秋季/演芸/共楽団	昭和9年10月29日	編輯兼発行人石本俊市	発行所大島共楽団	「秋季演劇プログラム」/共楽団員一同「御案内」/「初日の芸題/屋上の狂人/現代喜劇 十六形/歌舞伎劇 恋女房染分手綱」/「二日目の芸題/時代劇 やくざ巡礼/歌舞伎劇 絵本太閤記本能寺之段」/「三日目の芸題/やくざ巡礼/絵本太閤記本能寺之段」/「共楽団々員一覧表 昭和九年十月二十九日」/「おことはり」	石本の認印	冊子
共楽団報	昭和10年1月7日	編輯石本俊市	発行共楽団	「喜劇 明けゆく空」/「時代劇 茅の屋根」/共楽団々員一同「舌代」/「少女の踊り」/「現代劇 病葉」/「歌舞伎劇 恋飛脚大和往来」/「感謝欄」	石本の認印	片面1頁1枚

国立療養所大島青松園キリスト教霊交会所蔵分『報知大島』綴合綴芝居関係刊行物

*『報知大島』綴第4分冊1935年～1936年]						
共楽団報 第十四号	昭和10年10月8日	編輯石本俊市	発行共楽団	「口上」／「感謝欄」／カズヲ「開演に先立ちて」／「お知らせ」／「コピーニュース」	石本の認印	1頁1枚
演劇ニュース	*	*	*	「プログラム」／「漫談」	石本の認印	1頁1枚
演劇ニュース No.2	*	*	*	[プログラム]／「厠考」	石本の認印	1頁1枚
共楽団報 第十六号	昭和11年4月4日	編輯石本俊市	発行共楽団	大島共楽団一同「御案内」／「プログラム」／「感謝欄」	石本の認印	1頁1枚